調査報告　十七―四

鷺流狂言伝書『間之記』(三)

竹本幹夫
山本和加子

間之記　十

○錦木　△橋姫
○小蝶　○吉野静
○舟橋　○二人静
○小督　○照君
○空蟬　△二人祇王

錦木（十ノ1）

のしめ、長上下、小サ刀、扇。

是ハ陸奥けふの里に住者にて候。今日は物さびしき折柄なれバ、錦塚の他りへ立出、心を慰ばやと存る

（底本一行アキ）先世上に人の夫婦ニなる仲立には、皆なかふどと云事の有りしが、いかなれば陸奥当島の習にハ、何れにても其仲人といふハなくて、我思ふ女の門に錦木を立し時、逢ふべき男の錦木をバ取入れ、あふ間敷をバ取いれづ候。然バ約（ママ）速の木なれバ色どり餝るを以テ、則錦木とハ申習す。古しへ爰に田の長のありつるが、約（ママ）速の木を立申所に、彼娘取り不レ入置たりしを、男ハ心の内に存る様、此事人のかつて知らぬに於てハ我等もふつつと思切り可レ申が、早男女ともに其隠れなきに、あれこそ女にうとまれたる者よ抔と沙汰のあらバ、生てもかい有間敷と思ひ、夫より日毎に立けれど、終につれなく取入れず置たりし程に、男ハ思ひにあこがれ空敷成しが、誠に彼れハ二世迄と契りけるか、無レ程娘も相果しを、二人リを錦木共に塚に突こめ、則是成を錦木塚と申習す。又細布といふハ昔此所に悪鳥のありて、おさなき人を取なやますを、子を持たる者どもハ是をかなしミ、如何せんとたくむ所に、有こざかしき人の被レ申事に、かさ様に悪鳥の有て人を取にハ、鳥の羽根を布に拵へ着すれバ、必取止ム由申せしかば、我先にと是を拵へ着いたさせし時、元より鳥の羽根にて織たる布なれバ、はたばりせまくてむねなどのあい申さぬを、古哥にも恋路などにもむね合がたき恋とハよまれたると申。先我等のぞんじたるハ如レ此ニ候

近頃奇特成事を被レ仰るゝ物かな。扨ハ我等の推量ニハ、方々の御心中貴う御座により、彼者は思ひにあこがれ空敷成し程に、一扁の御回向にも預り度存、今又御僧にま見へ錦木細布（たるかと）のいわれ御物語致したるかと存る間、余りに不思議成御事なれバ、暫く是に御座候て、彼夫婦の者の跡を念頃（ごろ）に御弔あれかしと存る

御用の事も候ハゞ被レ仰候へ

心得申候

小蝶（十ノ2）

のしめ、長上下、扇、小サ刀。

（底本五行アキ）先此所ハ一条大宮と申て、無レ隠名所にて御座候。又是に見へたる古き宮ハ、古しへ光源氏の住せ給ひたる所なる由承ハる。然るに源氏の君と申は、忝も醍醐天王の第二の王子（わうじ）、御母ハアゼヂ大納言の御娘桐壺の前にて渡らせ給ふが、七才の御時源の位を給ハリ、夫より次第〳〵に御位増して、後にハ牛車（のくるま）をせんじを給わり、富士の浦にハ太上天王の尊号を得給ふにより、誰かたをならぶる者なかりたると申。其折節是成御橋のもとの桜花（ママ）今を盛りなるに、鶯のやどり木つとふ羽風に匂ひもいとゞかふばしく有たると申。

夫ニ付小蝶といふ物は春の暮より夏秋を送り、千草万木にたわむれを成し申せば、桜ハ初春に咲物なれバ、桜花にゑん無き事をかなしミ申に、其頃此紅梅の何よりも早く咲たるを悦、此花に小蝶の飛、種々珍敷たわむれけるを、紫の上より中宮への御哥に、花園の小蝶をさえや下草に秋まつ虫はうとく見るらんと、か様によみて参らせらるれば、御返哥に、小てふにもさそわれなましこゝちあり八重山吹をへだてざりせバと遊し給ひたるよし承ハる。誠に此花の盛りの時分ハ、輿車あまた立ならべ、しやば道をもふさぎ、大宮人の御遊覧の被レ成し所なれど、今ハか様にあれはてゝ名のミ斗りにて候。先我等の存たるは如レ此ニ候

舟橋（十ノ3）

是ハ佐野ゝ郡内に住者にて候。今日は物さびしき折からなれバ、立出、こゝろを慰ばやと存る

昔当国此佐のゝ在所に、忍び妻にあこがれたる若者の有しが、其両人のいへの間に川をへだてゝ住し故、いつも道ハ此舟橋を渡り行。夜更人しづまつて、ひそかに馴し間、初めの程ハ人の知らざりけれど、度重るに随て頓てあらわれ、一人知れバ悪事千里と世上にぱつと風聞致スを、後にハ二タ親の聞付申様、内々ハ可レ然縁者をも取んと思ひつるに、かゝるふしぎの仕合出来いたす事、人のおもわく外聞方々口おしきとて、我子の友達を頼ミ種々異見申せバ、はやか程に普くひとの御存といゝ、其上二世迄と契りし中なれバ、思ひ切ん事夢々成間敷よし申間、所詮此橋があれバこそ通へ、此橋がなくバ川を渡る事ハ成間敷と思ひ、彼両人の子にハ深く隠し、橋の板を二三間取はなして置を、夫をバ二人の子は夢にも知らず、兼てより契りしをたがへず、有闇の夜いつものごとく、更行鐘をしるべに内を出、橋の傍りに立休う所に、向ニ人のかげの見ゆるを我待君と思ひ、行間もおそしと心そぞろに成て、渡るとて踏はづし、落て空敷成を、今一人の者ハ知らで思ふ様、只今向より人の渡る姿の見へたるが、誰も此方へハ来らぬと思ひ、下おバ見づ向ふ斗りニ心ありて、尋行とて是も橋よりかつぱと落て相果申を、夜明て親々ハ子の見へぬを不思議に思ひ、爰かしこを呼べども居ざりし程に、扨ハ橋の下へも落たるかと後悔し、中々りうていこがれけれども其甲斐もなく、せめて死骸を成とも見たく思ひ、川の上下を尋けれど〔も〕なき折節、有古老の人の被レ申事に、か様に水におぼれてしがひの見へぬにハ、鶏を舟に乗せて他りをこぎ廻れバ、必ず死骸の上にてときをうたふといゝし程に、左様にいたそふずるとて鳥を尋ねけれど、昔より此佐のゝ三里が間、一円に鶏のなき在所なれバ、爰をもつて万葉集の哥に、東路の佐のゝ舟橋鳥ハなしとも、又ハ取はなし共、二流によまれたる哥ハ、いづれも本説にてあろふずるとの御事に候。先我等の存たるハ如此に候

近頃奇特成事を被レ仰るゝ物かな。左様に何国ともなく若き男の来り、忍び妻の子細委敷語べき者、此傍りにてハ

不レ覚候。扨ハ客僧の行力の達し給ひし故、彼者ハ恋の渕にしづミて罪深き身なれバ、難レ有き法味をも請度思ひ、頭れ出、声ことばを替したるかと存る間、余りにいたわしき御事なれバ、暫く是に御逗留被レ成、彼跡を御弔あり、重ねて奇特を御覧あれかしと存る
御用の事も候ハゞ被レ仰候へ
心得申候

小督（十ノ4）

初メシテ・ワキ出、中入スル。
シテ・ツレ・小督の局出ル。其後に出て太コ座ニ居。
柴垣の作リ物出ル。局の前へ直スト立、シテ柱ノ先ニテ、
童ハ此家の主じニてさむらふ。此程都方の上藪に御宿参らせて候が、琴とやらん申物を遊バさるゝと承り候間、参つて所望いたそふと存る
ト柴垣の側へ行、下ニ居テ戸を開キ、少し跡へ下リテ、
いかに申上候。今夜ハ八月十五日夜ニて、月も面白う御座候。又承れバ、琴とやらん申物を遊バさるゝと申せバ、爰元の者ハ左様の事ハ聞申さず候あいだ、少と遊バして御聞せ候へ
柴垣の戸を〆、太コ座ニ付。
観世流ハ是迄也。
後のせりふ望時ハ、
〈夫よりシテ出、ツレト色々謡有末に、
東屋の主ハいざ知らず、しらべハ隠レよも〔あも〕あらじ
ト謡終ると小督ニ向ひ、
いかに申上候。仲国とやらんハ、御目にかゝらん程ハ帰る間敷と有て、あの柴垣の本に露にうたれて御入候。何のくるしう候べき、此方へと御申候得かし
仲国此方（底本「行アキ」）へ御入候得
ト云テ笛座の上ニ居ル。仲国内へ入、色々謡有。
酒宴をなして糸竹の、声すミ渡る月夜かな
ト謡時ニ云。
いかに仲国へ申候。目出度折柄なれバ、一さし御舞候へ
ト云テ、座ニ付。
シテ方より女ツレ出ルゆへ、跡いらず。
仲国此方へ御入候へ、ト是切ナリ。
又其前。琴とやらん遊バして、御聞せ候へ。童も是ニて承り候べし
是切ニ而跡なし。
太夫へ問事。
宝生流ハ右のごとく柴垣あり。
観世流ハ柴垣真中ニ有ゆへ、戸を開キ内へ入て、琴所望する。
喜多流ハ柴垣の外よりいふ。
中入過て、小督謡過て名乗。又前ニ云も有。問べし。

箔、びなん、女帯。

空　蟬　（十ノ5）

是ハ中川の里に住者ニて候。今日た何とやらん物淋敷折柄なれバ、罷出、心を慰ばやと存る去程にいにしへの空蟬と申ハ、光源氏の中将と申せし時、いかゞ有けん中川の宿へ御出の折節、やごとなき女郎の一人リおハしますを御らんじ、頓て御心をうつされあこがれ給ひ、重て又御こし被レ成、今に始めず節々御出有つれども、つれなく御帰り有バ、弥むねの煙リもはれやらで、そゞろに思召し、有時闇の内へ忍び入給へば、兼てより源氏の躰をしろし召れたるか、其夜ハすご〳〵とねやをかへさせ給ひ、跡に衣斗りぬぎ捨置れしを、中将ハ御存なく、衣にたよりたる事のはかなさよと思召、此衣をぬぎ置れたるに付て、源氏一首口ずさミ給ひたると申。其時の哥に、空蟬の身をかへてげる木の元になを人がらのなつかしきかなと、か様によミて参らせられたれば、彼御方ハ御覧じけるが、則御返哥の有ける、空蟬の葉に置露の木がくれて忍び〳〵にぬるゝ袖かなと、か様によミかハし給ふゆへ、則空蟬と名付られたると申。夫より度々文を通ハされ、哥の御返哥などハ有つれども、ついに打とけ給ハざる由承ハる。是に付数多子細の有とハ申せども、先我等の存たるハ如レ此ニ候是ハ奇特成事を仰候物哉。左様にいづく共なく女姓の罷出、古き事ども語べき者ハ不レ覚候が、扨ハいにしへの空蟬の亡こん顕ハれ給ひ、声詞をかわされたるかと存る間、是に暫く御逗留あり、重て奇特を御らん有かしと存候御用の事も候ハゞ承ふずる心得申候

空　蟬　（十ノ6）

是ハ中川の里に住者ニ而候。今日ハ何とやらん物淋敷折柄なれば、罷出、心を慰ばやと存ル去程にいにしへの空蟬と申ハ、光源氏の中将と申せし時、いかゞ有けん中川の宿へ御出の折節、やごとなき女郎の一人おハしますを御らんじ、頓て御心をうつされあこがれ給ひ、重て又御こし被レ成、今に始めず節々御出ありつれども、ついにつれなく御帰り有ば、弥むねの煙りもはれやらで、そゞろに思し召、有時闇やの内へ忍び入給へば、兼てより源氏の躰をしろし召れたるか、其夜ハすご〳〵とねやをかへさせ給ひ、跡に衣斗りぬぎ捨置れしを、中将ハ御存なく、衣にたよりたる事のはかなさよと思召、此衣をぬぎ置れたるニ付て、源氏一首口ずさミ玉ひたると申。其時の哥に、空蟬の身をかへてげる木の元になを人がらのなつかしきかなと、か様によみて参らせられたれバ、彼御方ハ御覧じけるが、則御返哥の有ける、空蟬の葉に置露の木がくれて忍び〳〵にぬるゝ袖かなと、か様によみ替し給ふゆへ、則空蟬と名付られたると申。夫より度々文を通ハされ、哥

の御返哥などハ有つれ共、ついに打とけ給ハざる由承る。是ニ付数多子細の有とハ申せ共、先我等の存為ハ如レ斯ニて候

是ハ奇特成事を仰候物哉。左様にいづく共なく女性の罷出、古き事共語べき者は不レ覚候。扨ハいにしへの空蟬の亡こん顕れ出、声詞をかわされたるかと存ル間、是に暫く御逗留有、重て奇特を御らん有かしと存ル　御用の事も候ハゞ被レ仰候へ　心得申候

（以下白紙一丁の後に続く。〈空蟬〉ではなく、〈維盛〉の間語りの替文句か）

又曰

大いなる松の木をたをし、泣々名跡をぞ書付られける。祖父大政（ママ）大臣平の朝臣清盛法名浄海、親父小松の内大臣の左大将重盛法名浄蓮、三位の中将是盛法名浄円、年二十七才。寿永三年三月二十八日、なちの沖にて入水すと書付て、又船にのり沖へ漕出、高声に念仏百遍斗りとなへ給い、南無と唱ふる声と共に、海へこそ飛入給いける。与惣兵衛・石童丸も、同じく御名を唱へて、続て海ニぞしづミける

橋姫（十ノ7）

是ハ宇治の里に住者ニて候。今日ハ物淋敷折から成バ、橋のほとりへ罷出、心を慰ばやと存る。扨々はなやかな事哉。是成バ早々罷出う物を

イヤ是成御僧ハ（ママ）

（底本一行アキ）去程に橋姫の明神と申ハ、昔平等院にて一切経供養の有しに、其時の導師は恵心僧都にて御座候ひしが、供養も中半ばと見へし折節、何国ともなく木の葉一枚吹来り、僧都の御衣の袖に落止るを、取上給へバ虫食の文字有。不思議ニ思召、よく御覧有バ、極楽へ行船の便りにといふ哥の下の句ありしを、僧都上の句を付させ給ふ。法（のり）知らん人を尋て渡さばやと、か様によみつがせ給へば、聴衆（てうじゅ）の中より女性一人進ミ出、涙を流し申様、只今の御詠哥を近頃有難く覚へ申なり。乍レ去法知らん人を尋て渡さばやと有時ハ、我等ごときの愚智無智の衆生ハ、極楽へ参事成間敷とて、さめ〴〵と泣ければ、僧都不思議に思召、左有バ汝上の句を付候へと仰られしを、彼女少しもじする気色もなく、知る人も知らぬ人をも渡さばや極楽へ行舟の便りにと、かく詠ずるを御聞被レ成、僧都高座より下り給ひ、三度礼し給ふ故、貴賤の聴衆老若男女ともに、彼女人を拝（はい）し給ふ。さて此女人を如何成人ぞと存れば、則宇治の橋ひめにて御座ありたると申。又摂州住吉の明神、あの津守（つもり）の浦より川舟ニ被レ召、此橋姫の明神へ通ひ給ふと承ハる。御影向の御時は、取分波音もあらくきこへ申。則通ひ給ふ御時ハ、殊更六月朔日成由申伝へ候。先我等の存たるハ如レ此ニ候。

（底本四行アキ）うたがふ所もなき橋姫の明神ニて御座有ふずる間、是に御逗留被レ成、重て誠の神姿を御覧あれかしと存る

吉野静（十ノ8）

ワキ太鼓座へ来り、下ニイルト出ル。

ヲモヅワヒ〳〵　ッレブウ〳〵

二人たがい違ひに云テ、舞台へ出テ、ヲモハシテ柱の前、ツレハ三大臣の前に、下ニどうと居テいう。

何とて皆おそいぞ　去ば常の口とハ違ふて、皆ゆだんな

ワキ太鼓座より出て、舞台真中え来ルト、二人立テ云。旁々ハいかなる人なれバ、此吉野十八郷のおとなの衆会（しゅへ）の座敷へ、ぬれわらんずでハ余りでおりやる

ヲモ何と都人じや

ヲモ夫ならバ先是に問う

アド ツレ夫が能ろう

ヲモ都人ならば御存じで有う。判管殿（ママ）ハ此山をいか程で開かせられたと申ぞ　ワキシカ〳〵

ヲモ十二騎とハ十二人の事か

ヲモ夫ならバ両人致て成共追かけ申さう　ト云テ両人行を、ワキ留ル。

ヲモ其方ハ判官びゐきの人じやよ　ワキ詞少し有。後のとがめ

もおそろしや、お暇申候ハん、ト謡ト二人モ同謡。

ヲモ此方もお暇申候わん〳〵

二人少し行うとして取てかへし、

ヲモのう〳〵都人に物おしへ申さふ。勝手の明神の御前にて、静の新法楽（しんほうらく）が御座る。是を御見物なされようズル、ト云テ入也。

嶋、袴くゝり、小サ刀。

ツレ、同断。

二人静（十ノ9）

御前に候　畏て候

いかに菜摘（なつみ）の女へ申候。何とて今日ハおそく帰り候ぞ、とう〳〵帰り候へ。其分心得候へ〳〵

観世・金春、間なし。

嶋、狂言上下、こし帯、扇。

昭君（十ノ10）

抑是ハ胡国（ここく）の主漢邪将（あるじかんやしょう）に使へ申けんぞくニて候

二人左右へ立。

わごりよ達ハ何として出さしました　そなたがあまりあわたゞしう出たによつて、何事かと思ふて是迄ついて出たよ　扨ハ様子を知ぬか　是ハ壱人の時　いゝやしらぬ。語て聞せい　心得た。去程に我等の是へ出る事、余の義にあらず。只今此所へ頼申御方の御出ニテ候。其子細ハ唐土（こうど）古保の里に伯道（はくどう）・王母といへる夫婦の民の有つるが、一人の姫を持。余りに美女成ゆへに帝へ召れ、其名を昭君と付給い、御てふあい限りなかりたると申。然るに頼ミ申御方

と元帝と御軍ましまして、已に漢邪将の勝軍ニ成給ふ。左有に依て、元帝の方より和だんましまして、三千人の后の内一人遣し可レ申と御約速にて、軍もやミ申候。元帝思召るゝ様ハ、三千人の内、随分見ぐるしき后を被レ遣べしとて、其時の絵師毛延寿に被ニ仰付一、三千人の后の絵姿を写させ申せとの御事ニ付、三千の后達ハ、彼絵師もうゑんじゆの方へ色々まいないを遣し御申候。然るに昭君斗リハ遣ハされず候ニ付、毛延寿そねミ、不レ残美人ニ書候中ニ、昭君の御姿斗り見ぐるしう書申を、帝ハ其絵姿を御らんずるに、不レ残美人ニ書し中ニ、昭君の姿斗り見苦敷書て有るを、帝もふしんに思召せど、一たん御約速の有故に、見苦敷昭君を胡国へ被レ遣けれバ、漢邪将嬉しく思召、則王昭君と名付御申有といへど、胡国のゑびすの恐敷有様を御覧じ、只唐土の事斗り御申有て、終に空敷御成有、漢邪将も昭君の御別れをかなしミ、是もむなしくならせ給ふ。左有ニ依て照君の父母是をなげき給ひ候間、死後の姿を二度見せ申そふずるとの御事成バ、我等ハ御先へ参れと有が、そなた達もおりやるか　中々参うとも　夫成バ、さア〳〵おりやれ〳〵　心得た　ヤア〳〵何といふぞ、はやくるしミの番と申か。夫成バ早く迷途へ帰ろう。そなた達もおりやれ〳〵　身共ハ先へ行程に、其方衆ハ跡からおりやれ

シテ中入。

ゑんとんに向い泣いたり〳〵。

ヲモ

厚板、かるさん、こし帯、鬼頭巾、厚板壺折、面。

ツレ二人

厚板、くゝり袴、こし帯、官人頭巾、面。

登り髭、鼻引、見徳、ウソ吹、等ニテ宜。

二人祇王（十ノ11）

御前ニ候　畏て候

いかに祇王御前へ申候。仏御前を伴ひ、早々御参りあれとの御事ニて候。其分心得候へや

是ニ候　畏て候

誠ニ珍敷からぬ御事なれど、いにしへより天下を治め給ふ人多といへ共、中ニも此君清盛公ハ、天が下をたな心の内ニ治メ給へバ、何事も思召儘に御座候。然に爰ニ祇王と申白拍子を召置れ、朝夕御てうあひ不レ浅ざりし折節、又賀加の国の白拍子ニ、仏御前と申て並なき美女のおハしけるが、舞の上手成由、只今風と御前へ出られ、相国に御対面おハしまし候。夫ニ付清盛何とか思召候やらん、瀬の尾殿を以、祇王と相舞ニ舞へと仰出され、両人共に舞の上手成由聞及びて候間、我等も物かげより見て、重ての咄しに仕ろうと存る。いや由無一人り事を申ておそなわりた。急で二人の人々を呼出そふずる

いかに祇王・仏御前へ申候。装束を召れ候ハヾ、早々出られ候へや

享保十七、西丸ニて被ニ仰付一候処、脇方不レ覚ニ而御断ニ付、宝生新之丞勤申候。仁右衛門方ニて呼出し無に、シャベリニ仕候。

嶋、狂言上下、こし帯、扇さし。

間之記

○春日龍神
○是界
○熊坂
○土蜘
○小鍛冶

十一

○舎利
○車僧
○橋弁慶
○弦上
○枕慈童

春日龍神（十一ノ1）

観世流〔墨滅〕〔ハ語リ〕

のし目、長上下、短サ刀、扇。

〔底本一行アキ〕是ハ和州南都に住者ニ而候。去程に珍らしからぬ御事なれど、先我朝ハ天地開闢より神国なれば霊神国々に数多御座スとハ申せども、中にも当社の御本地ハ、誠やらん釈薬地観文にて御座すが、和光同塵の結縁に仮りに春日の明神と顕ハれ給ひ、迷ひの衆生を八相成道被レ成、終に仏道に引入給ふと承る。現世安おん後生善所の為に、知もしらぬも押なべて、歩ミをはこぶ衆生数限り無ニ御座一候。夫ニ付、此程ねられざるまゝつくゞ〳〵と存る様は、誠に老少不定の世の中に唯亡前とあかし暮さんより、某も後の世を願ハんと存に付、先いづれの宗旨にならんと彼方此方と存る所に、梅の尾の明恵上人当社へ御参詣のよし風聞いたすが、誠か偽りか、参って見申そふずる

〔底本一行アキ〕いやさればこそ、是に御座候よ。此程ハ久敷上人の御参詣被レ成ぬとて、南都の人々待申されたるに、此度の御登山先以テ目出度う候。いつも御参詣被レ成るゝ時ハ、五日十日以前より其かくれなくて、皆路地迄御迎に参り候が、

此度ハ御沙汰もなくて、風と御参詣ハふしんに御座候
（底本一行アキ）是ハ思ひも寄らぬ事を被レ仰るゝ物かな。上人の御身にて経論聖教に御望は有間敷に、はる〳〵の波とうをしのぎ、天竺震旦え御越しあらば、其間ハ明神も淋しく思召れふずる。其上古人の宣ふ様、他国の仏跡を拝度思ハゞ、秋津洲比叡山は天台山を移されたり。又霊就山を志の輩ハ、則当社へまふで給へ。春日の御本地は釈迦如来にておハしませば、此三笠山の冬がれを、是ぞねはんの所と観念し、礼し申と承ハれバ、和国に御座有りても同じ御事なれバ、此度大唐月氏国への渡海の儀ハ、只思召御とまりあれかしと存る

古人のの給ふ様、華国の仏跡を拝ミ度思ハゞ、ト云てもよし。

（底本二行アキ）言語同断奇特成る事を被レ仰るゝ物かな。左様のあらた成御ことハ、昔も今も聞も及バぬ御事なれバ、此辺の人にも罷出、拝ミ申せと相ふれ申さふずるか
（底本一行アキ）畏て候
（底本一行アキ）やア〳〵皆々承り候へ。此度梅の尾の明恵上人の御参詣ハ、入唐渡天被レ成るゝ御暇乞成るを、慈非万行の御神なれバ、今夜の内に三笠山に五天竺を移し、上人に拝ませ御申可レ有との御事なれバ、こゝろざしの輩ハ皆々罷出、拝ミ申せとの御事なり。相かまへて其分心得候へ〳〵

春日龍神（十一ノ2）

（底本二行アキ）末社
か様に候者ハ春日大明神に仕へ申末社の神にて御座候。去程に珍らしからぬ御事なれど、先我朝ハ天地開闢より神国なれば、霊神国々に地をしめ給ひ、威光まち〳〵成とハ申せども、中にもこの春日大明神ハ、諸神にいやまし霊現あらたなる御神なれば、神護慶雲二年に河内の国平岡より当国三笠山へ御影向あり、もろ〳〵の菩薩の和光の姿をかりに顕ハしおハしまし、現世安おん後生前所の慈悲万行の御神なれバ、四海万民愚智無智の輩、毎日毎夜老若男女ともに袖をつらね、くびすをついで歩ミをはこぶ衆生数限りなければ、神前の一入賑ハしうまします御事、凡ならびたる神も無二御座一候。左有に依て、当社へ参給ふ貴僧高僧多しといへど、中にも梅の尾の明恵上人をバ太郎と頼ミ、笠置のげだつ上人をバ次郎と名づけ御申有。（□□名付）昼夜のおふご誠に難レ有御事ニて候。其中にも明恵上人ハ過去より殊勝におハしますにより、明神も直に御声を御かハし被レ成候。夫のミならず、御登山の折節ハ氏人の国民等ハ申に不レ及、何の心なき鳥類畜類迄も皆奈良坂へ御迎に出て、膝を折、羽をたれ、いにやうかつごう仕候。去バ夫程貴き御方なれども、御心中にいかゞ思召候やらん、俄に入唐渡天可レ有とて、只今当社へ御暇乞に参り給ふを、明神ハいらざる事と思し召、秀行を以て御留あれば、我れ仏跡を拝まん為との

たまふを、経論聖教の内ニても御存じ可レ有との御事なり。其上天台山を望む人ハ、比叡山に参るべし。又霊鷲山の志の輩ハ、幸ひ当社を御信向有れ。則五なひ山のすミかけおつて、吉野・築波と成りたれバ、我朝に御座有ても同じ御事なれバ、遠海万里のはとふをしのぎ給ハん事、さりとてハ御無用と御留被レ成るゝ。猶もふしぎに思し召さバ、今夜の内に三笠山に五天竺を移シ、まやの誕生がやの成道、じゆぶうの説法、仏御入滅の躰迄も、ことゞ〳〵く拝ませ御申有べきとの御事なり。然バ俗在出家男女に罷出、拝ミ申せとの御事なり。相構へて其ぶん心得候へ〳〵

是　界　（十一ノ3）

（底本二行アキ）か様に候者ハ叡山の僧正に仕へ申沙弥にて候。去程に我等の是へ出る事別の儀にても御座なひ。先大唐の天狗の主領是界坊、此年月つく〴〵と思ハるゝ様、我国震旦におゐて慢心の高僧数多有とハいへど、皆我道に誘引せずといふ事の無に、仏法東前と聞時ハ、心に懸る間、如何様一度は日本ニ渡リ仏法をさまたげんとたくミしが、其心中をたがへず此秋津洲に来る。乍レ去太郎坊と言合せずハ成間敷と思召、先愛宕山へ行、案内を申さるれば、太郎坊御出合、此方へと請じ被レ申、扨只今ハ何の為の御出ぞと御尋あれば、是界答へて申様、唐土におゐてハ医王山しやうりう寺、盤若台に至る迄、ことゞ〳〵く摩道へ引入申たるが、誠や日本ハ未だ仏法さかん成よし申間、旁も御同心ならバ我が行徳をも見せ申そふずるとの給へば、太郎坊下心にハ同心被レ申ねども、某事ハいさい心得存る、又あれに見へたるハ比叡山とて我朝の天台山にて候間、先あれへ御出あり、心のまゝ伺ひ御申あれとの給へば、是界ハ悦び愛宕山を立出る。仏法の事ハ申に不レ及、先王法をさまたげんと致を、僧正に御出有て御祈禱あれとて、度々勅使立申ニより、則参内被レ成れんと思召ど、さすが頼申人の御出の事なれバ、御車の牛かひのと有ッて次第〳〵の御供役人の仰付られ、彼方此方と御用しげきにより、おそなハリ給ふ事もよぎなき次第にて候。然りとハいへども国土に住身の、勅定を油断有りてハそらおそろしきに、たとへ僧正はおそく共、先此観じゆをさへ御寺を出せば、はや捧げ申たるも同じ御事成れバ、拙者ニ早々持て参れとの御事により、取物もとりあへず是迄罷出た。急で伺公致さうずる。誠に珍らしからぬ御事なれど、先我朝は天地開闢より神国なれバ、如何に摩軍の是界成リと言ども、りやうじにさまたぐる事ハ成間敷と存る

あらふしぎや。今迄能天気が俄に雲の気色がかわりたるハ、是ハ何としたる事ぞ。殊に辻風吹テ来て、跡へも先へも行れそもなひ。実と今思ひ出した。かの是界とやらんハ神通を得て、大内へ御参り有事を存、はや摩のわざをなすと見へたよ。夫ならバ我等の壱人すゝんで、先へ行はこハ物じや。爰許に居て頼申人をまち、御供仕らふずる。然バ此辺りの人を頼ミ申ぞ。是へ僧正の御出あらバ、我等へ御

しらせあれ。相構て其分心得候へ〳〵

熊坂（十一ノ4）

（底本二行アキ）
是ハ青墓の宿に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれバ、青のが原の辺りへ立越、心を慰ばやと存る

（底本二行アキ）
いや是成御僧ハ、此傍りニ而ハ見馴申さぬ御かた成が中々

（底本二行アキ）
さん候、此所に法躰の身にて悪逆をいたし相果たる者ハ、爰に熊坂の長範とて、無レ隠盗人の有しが、則此青墓の宿にて、終に空敷成り申せしを、承り及びたる通り御物語り申さふずる

先熊坂の長範と申ハ、生れハ北国の者なりしが、幼少の時よりかりそめに人の物をかすめ、それをおさな心に面白く思ひ、夫よりひたどりに取程に、後にハ悪盗の名を得、諸国の盗人かれに付そい、有徳成者をおさへて取るに、一度も不覚をいたしたる事なかりたると申。然バ源家の大将義朝の末子、常盤腹にハ三男、沙那王殿と申少人のおハしますが、平家の代の万みだんなる有様を御覧じ、何卒して東国に下り、御舎兄兵衛佐殿へ此事を申、いかさま一度ハ切て登り、源氏一統の御代となし度思召折節、其頃三条の吉次信高といふ商売人ハ、毎年五幾内の宝物を買集め、奥へ下る商人を御頼ミ有御下向あるを、夫をバ夢にも知らずして、長範ハ吉次が高荷を取んとたくミ、京都を出る時より目付を置、当国赤坂の宿にまんまと付込、くつきやうの盗人七八十人、此青野が原へ寄合談合いたし、夜半過鳥の前と覚しき時分、吉次が旅宿へ夜討を掛し刻、内にハ老たる若いに寄らず人多しと云へども、何れも路地に草臥、前後も知らず伏たりしに、沙那王殿斗り只御壱人渡り合、すゝんでかゝる盗人を残りずくなに討給へバ、夜盗の大将長範ハ独り無念に存じ、打物を追取直し少人に切て掛り、つめつひらいつ請つながいつ、秘術を尽し戦へど、沙那王殿にハ年月の手柄も出ずして、ついにハ打れたると申。夫迄ハあの人見の松に遠見を置、登り下りの旅人、里通ひの者迄も、やらずすごさず打取はぎ取仕り、近国他国の者迄も迷惑致シたるが、熊坂が果てよりハ、上下の旅人も心安く通りたると申。先我等の存たるハ如レ此に候

土蜘蛛（十一ノ5）

（底本二行アキ）
是へ罷出たる者ハ、源の頼光の御内独り武者に仕へ申者ニ而候。去程に我等の是へ出る事別の義にあらず。此程頼光ハ風のこゝちにて御座有により、医師数を尽して御養生被レ成るれど、其印更に見へぬ所に、今宵夜半斗りと思敷時分、誰共知ぬ僧形壱人来り、頼光の御枕近く立寄て申様、今宵の御こゝちは何と御座あるぞと尋けれバ、頼光心に思し召よふ、あらふしぎや、僧形の殊に夜ふけて是へ来り、我を問事不思議なりと思召、汝ハいか成者ぞと枕を上ゲて御覧ずれば、かの僧ハ古哥にて御返事を申た。其哥に、我せこがくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてやハし

ると、か様に詠ずるを御聞被レ成、扨は化生の者と思召、不断御側に置せらるゝ御太刀をぬき、てうど切らせらるれバ、暮に失て見へぬ内に、頼ミ申人是を聞付、其まゝ御前へかけ付給ひ、御声の高く聞つる間、心元なふ存じ伺公仕候と被レ申けれバ、扨も早く来りたるとて御感有、今の様躰語つてきかせうと有て、跡先の事をつぶさに御物語被レ成るれば、今に初ぬ御手柄共にて御座候。実ニものりの引たる様躰隠れなけれバ、是を知るべに某ハ尋参り、かの物を退治仕らふずるとありけれバ、頼光も尤と仰らるゝに付、頼申人ハ化生の物を退治に御出レ被成るゝにより、我等躰の者にも御供に参れと仰付られた。是ハ何として能らうぞ

小鍛冶（十一ノ6）

（底本二行アキ）

罷出たる者を御存ジ無人ハ、何者ぞと思召れうずる。是ハ都三条の横町に小家を持て、幼少の時より細工を致。我等ハ小鍛冶宗近の弟子にて候。去程に宗近の打被レ申たる太刀かたなハ、とぎの重なるに随つて焼刃をあざやかに見せ、地はだつまりて年々にへ顕れ、ぼうし合抔に様々のちけい出来、業ハ和らか成も堅き物迄も、さハる所ハかけずたまらぬ物切なれば、老若共に小鍛冶を指ぬ人ハ、皆男ハ成らぬ様にの給ふ程に、国々より日々に打物誂へ申さるれど、少も隙なくて皆々請取被レ申ぬを、又様々の縁を以て御頼ミ被レ成るゝ。夫ニ付爰に目出度事の候。今の帝一条の院、此程つく〳〵と思召るゝ様、人間ハ如何成高位成も下々成も、老少不定の習ひなれバ、我一天の君とあをがれ天下泰平の御代に、何ぞ国土の宝に成事を被二成置一御名を高記に留度思し召ど、詩哥管弦墨跡も器用がなけれバならず、諸道具の内ニも剣ハ身をはなさで朝敵をも鎮ヅめ、昔せうきのけん村雲の剣とて今に名高き宝なれバ、剣を打せて置んと思し召、今日の本に太刀を何者が能打ぞと御尋あれば、鎌倉物が見事な、いや〳〵大和物ハ業がよい、備前が上手じや、北国にハ替り物が有など、公卿大臣さま〴〵に被レ申しを、有古老の臣下すゝみ出て申さるゝ様、小鍛冶にましたるハなき由風聞致とあれバ、実にも是が上手成よし一同に仰らるゝニ付、殊に今夜帝に不思議の御霊夢ましまして、三条の小鍛冶宗近に御剣を仕れと、橘の道成の卿、宣旨を請、勅使立を、宗近一世の面目と存ジ、謹で申上らるゝ様、御剣など仕るにハ、我におとらぬ相槌打者無くてハ罷ならず候へども、倫言ハ汗のごとく、出テ二度返らざるゆへ、是非無お請を申されたるが、なんぼう大事の御請にて候。宗近心に思ハるゝ様、か様の大事の打物をバ、神力を頼まずハ成間敷と存、先氏神稲荷へ参り給ふ所に、何国ともなく見馴ぬ人の出て、面々ハ三条の小鍛冶宗近にて候か。雲の上成君より御剣を仕れと有を、心安く思ひお請を申上、檀をかざりて待給へ。其時節我等も行て力を添んといゝもあへず、其儘しげミの内え入給ふを、剱の勅ハ只今成に、早しりたるハ扨も〳〵奇特成とて、弥稲

荷の明神を信じ、下向被レ申たが、なんぼう目出度御事にて候
（底本一行アキ）イヤそこ元の賑やかなハ何事ぞ。ヤア〳〵何といふぞ。扨も〳〵早い事かな。頼ミ申宗近の所にハ、今度の御剣を仕らんとて、新敷かり家を立、檀を築、其上にかな床をすへ、稲荷明神を勧請申、細工所にハ夥敷用意なれバ、小鍛冶を学ぶ衆ハ宗近の所へ詰らへ候へ、相構へて其分心得候へ〳〵

舎利（十一ノ7）

（底本一行アキ）ワキニ付出ル。狂言座ニ居。
（底本一行アキ）誰にて渡り候ぞ
遠国よりはる〴〵と御参りなれば、拝せ申度ハ候へども、此泉涌寺の仏舎利と申ハ、りやうじに拝せ申事ハ罷成ず候が、当月ハ某御戸を開く番にて鍵を持合せたると申、殊に今日ハお舎利を取出す日なれバ、御戸を開き仏舎利を拝ませ申そふずる
（底本二行アキ）最前の人の渡り候か
（底本一行アキ）御戸を明ケて候。御拝候へ。又其後大唐より渡りたる山門の十六羅漢の御拝ミ候へ
（底本一行アキ）心得申候
（底本二行アキ）クハバラ〳〵。ア、かなしやの〳〵
（底本一行アキ）今ちと気が付いた。扨只今のめり〳〵どふとなつたハ何事ぞ。鳴神かと思へばそふでもなひ。何がなつた事ぞしらぬ。是ニ付ても後生が一大事じや。愚僧も菩薩の道を随分心懸るとハ存れども、今の鳴内ニハ仏共法ともわきまへの無つた時ハ、兼ての心懸がかんよふで御座る。先舎利殿へ見廻申そうずる
あら不思議や。いつもより内がはれやかになつた
ヤア〳〵此お舎利をバ何者がどこへ取ていたぞ。今思ひ当つた。最前出雲国三保の関より登られた、その悪僧が取つていた物で有ふ。扨も〳〵腹の立事哉。急いで追懸申そうずる
いや未だ是におりやるよ。ヤアラ方々ハとゞかぬ物じや。急で仏舎利をおかへしやれ
（底本一行アキ）しらぬ
いや知らぬとちんじたりとも、しらせいで置ふか
（底本一行アキ）実とおしやれバそふじや。御出家の身として偽りハおしやるまい。其上お取りやつたならバ、爰許にハ御座るまい。方々の御心中に思召るゝハ、如何に大事のものが失たりとも、旅人にてもあれ、髪をおろし仏躰の姿にて、しかも十力の数珠を手にまとい、にんにく二躰の衣を着したる者を、理も聞分ず、りふじんに盗賊人に打ふせ、きつい事を言たると思召れうずれ共、此泉涌寺の仏舎利と申ハ、釈尊御入滅の御時、八万の大衆ハ不レ及レ申ニ、五十二類迄なげきかなしむ折節、そくしつ鬼といふ足はやき鬼が、成仏のそくわいをとげんと思ひ、仏の御歯を引もぎ、行方しれずこくうに

失けるを、異多天と言本尊ハ、仏にぶくを備ふる時、毎朝定て三部の鐘を三ツ打に、壱ツ打内に三千世界に行わたり、二ツ目にハ諸仏に委〳〵く相触給ひ、三ツ目にハ本寺へ御帰りある程の早き異多天のおつかけ給へバ、しつきはしゆミを七へんまで順に逃廻ハれバ、異多天ハ逆に参り、追欠追付おさへて取返し持給ふを、去子細あつて当寺の御宝となし申。釈尊肉付の牙舎利なれバ、常にハ御戸をさへ開き申さぬに、今日たとり出す日なれバ、方々にも心静に拝ませ申て置たるに、か様に行方しれず取られ迷惑致候が、扨お僧の是に御座候内に、如何様成者が参りて候ぞ

（底本二行アキ）何と只今あやしき者の参り、天井をけやぶりこくうにうせたると仰らるゝか。扨こそいつもより内がはれやかに成たと存たれバ道理じや。是を見るに付ても、弥お僧の御存ないがしれた。此天井をけやぶつた躰ハ、中々人間のわざとハ見へぬ。お僧ハ如何成者で有ふと御すいりやう被レ成たるぞ

（底本一行アキ）仰らるゝ通り、古しへのしつきが今にしうしんの残し、此度ハ人間と現じ、取て行たる者で御座あらふずる。然らバ人力の分にてハ成間敷候。幸異多天ハ当寺の守本尊なれバ、かの仏にきせい申、二度取かへし申そうずる

（底本一行アキ）然バ方々も力をそへて給ハり候へ

（底本二行アキ）一心頂礼万徳遠満釈迦如来信心舎利、此度足しつ鬼の取りて行たる仏舎利を取かへし、二度当寺の御宝となしてたび給へ、南無異多天〳〵

車　僧　（十一ノ8）

（底本二行アキ）か様に候者ハ太郎坊の御内成溝越天狗にて候。某を何故斯申ぞなれバ、洛中洛外の大溝・小溝を越る事、京童べの誰にても続く者のなけれバ、我程身の軽ひ者ハ有間敷と自慢仕りたる故、太郎坊の羽先にてそとなでられ、か様にミぞこし天狗とハ罷成て御座る。夫に付世にハ不思議成事の有ぞ。爰に車僧とて貴き僧のおハしますが、牛も引ず人も引ぬ車に乗て、山川竹木巌石共いわず、谷峰をも陸地のごとく飛行自在に飛かける人の候が、左有に依て我程貴き者ハ有間敷きと慢心の有を、太郎坊ハにくきと思召折から、彼僧今日嵯峨野の他りへ来るを御覧じ、頼ミ申御方嬉敷思ハれ、山伏の姿に成て出合給ひ、詞をかけ給へば、いたづら者がねそ〳〵と何事ぞと答ゆる時に、太郎坊一首の哥に、浮世をバ何とかめぐる車僧まだ輪の内に有とこそ見れと、かく仰らるれば、車僧も即座に、浮世をバめぐらぬ者を車僧のりもうるべき輪があらばこそと申たを、某の推量にハ、かの僧の乗たる車の輪の事かと存たれバ、一向左様にハ無て、禅の話答と申て、一千七百速斗り有事を、太郎坊も未ださんぜぬといふ心にて仰らるれば、車僧ハこと〳〵くさんじて有程に、乗もうるべき輪があればこそと被レ申た。又太郎坊ハ、のりもうるべき話があらばこそといふハたそと、か様に仰られたを、常の詞かと存じたれバ、是もさハなくして、たそ〳〵と尋る時ハ逢もせでたそにはなれてた

そにこそあへと、是も正しうたその話の心にて有げに候。時に空道風すゞしいと、彼こくふを吹風はすゞしいとな。我が名のミ高尾の山に云立る人ハ愛宕の峰に住ずして。お僧の住家ハいかに。一所不住。車ハいかに。火宅の出車。めぐれどめぐらず、引も引れぬ車僧じや。世の中ハ生死の引手峰の松火打袋に鶯の声。か様に知れぬ事を半時斗りたゝかハるゝに、一字滞る事の無けれバ、頼申人の心に思召様、か様に貴き僧にりやうじに詞をすごしてハと思召、去給ハん詞のよし無て、我が住方ハ愛宕山、ちと太郎坊が庵室へお尋あれと言もあへず、其儘飛で御帰り被レ成、我等の木末に何心もなく遊山仕り居たるを、急ぎあれへ参り、車僧をなぶつて見よと被レ申るゝ程に、取物もとりあへず是迄罷出た

扨かの為せ坊主ハどこ元に居るぞ。参つて見申さふずる〈一扁廻る〉内々聞及ふだ僧じや程に、常々見たいと思ふたに、嬉しい事じや

去れバこそ是に居らるゝ。已に行当らうとした。先見た所が貴そうな僧じや。太郎坊も詞をおかけやつた程に、我等も詞をかけう

（底本一行アキ）いかに車僧〳〵

しゝの角を峰がさいた様に、そつとも用いぬ顔じや。何として能ろうぞ。イヤ思ひ出た。人ハ老た若ひも又貴人高人も、おかしい事ハこらへられぬ者じや。いかに車僧が貴く共、こそぐつたならバこらへられまい。こそぐつて成とも笑ふ気色の有ならバ、魔道へ引入レたも同前じや。ちとこそぐらふ

（底本一行アキ）クツ〳〵、クツ〳〵〳〵〳〵〳〵

（底本一行アキ）おかしいか車僧。面白ひか車僧。車僧の鼻の先を廿日鼠が土俵靴を後ろに急度つけて、こなたへハちよろ〳〵、此方へハちよろ〳〵、ちよろり〳〵〳〵、ヤアおかしいか車僧。面白ひか車僧。笑わずともわらハせう、こそごろや〳〵、クツ〳〵ヤ〳〵

（底本二行アキ）あいた〳〵〳〵

兎角某の分でハなるまい。太郎坊を呼いだそう

いかに太郎坊〳〵引

橋弁慶（十一ノ9）

（底本三行アキ）是ハ下京辺に住者にて候

去程に平家ハ一天四海をたなごゝろの内に治め給ふといへど、入道相国の悪逆により、諸人いきをつめて居申処に、此程西塔の武蔵坊弁慶ハ、宿願の子細有て東山十善寺に参籠被レ申しが、又今夜よりも五条の天神へ丑の時もふでせんと有を、去人異見被レ申しハ、きのふ夜ふけて五条の橋を通りし時、十二三なるおさなき者の、小太刀にて切て廻るハ、さながら蝶鳥のごとく早けれバ、今夜の丑の時詣でをバ思し召留れかしと有を、たとへ如何なる天魔鬼神成といふとも、弁慶程の者が聞にげハせまじい。是非共参ふずると有ハ、なんぼう不思案な人でハあるぞ。其橋へ出て人

をきるおさなひ者を能聞ば、源家の大将義朝の末子、常盤腹にハ三男、沙那王殿と申少人のおハしますが、幼少の時より父におくれ、鞍馬の東谷とつこの坊に御入有頃、天狗に兵法を御相伝被レ成、稽古の手がらを見せ度思召 折節、此ころ母上に向顔のため、都へ登り給ふが、其児子の日暮て五条の橋へ御出あり、行来の人をやらずすごさず切らるゝといふ。よし〳〵沙那王殿にてもあれ、また化生の者にても候へ、此年月人の前にて口をきゝながら、か様のしれ者を只おかんも口惜きに、今夜弁慶よりも先へ行、かのいたづら者を退治し、天下におゐてほまれを取らふと存る

（底本一行アキ）ヤア〳〵そこ元の賑やかなハ何事ぞ

ヤア〳〵じや。誠に五条の橋近くかして殊の外賑やかな。某抔の爰元にいてしぜん切れてハいかゞな。是より罷帰らふ。只急でのけ〳〵

弦上（十一ノ10）

（底本三行アキ）か様に夜中まかり出たる者を、御存ない人ハ何者ぞと思召れうずる。是ハ大政大臣諸長公の御内の下々にて候。去程に諸長公ハ天下に無レ隠琵琶の上手ニて御座候が、いかゞ思召候やらん、俄に入唐渡天被レ成れんと思召、国々の名所旧跡を御らん被レ成るゝ躰にて、下心ハ唐土への門出と思し召、先都を出て山陽道に趣き、須磨明石の月を御覧有所に、ある片原に老人夫婦柴の庵を結び、よしありげに住しゆへ、立寄一夜の宿をかり給ふに、姥出て頓て内へ入奉り、様々もてなし被レ申、琵琶の一曲を所望致せし間、安き間の事ひゐて聞せうずると仰られ、被レ遊し折節、時ならぬ村雨降来り、調子の違へバ、翁はとまを取出し屋根をふくを御覧じ、何とてもらざる家根をとまにて葺給ふぞと仰られけれバ、翁答ていわく、さん候、屋根に当る雨の音ハばんしきりなり。また音楽の音ハわうしきにて、調子の違へバ態ととまにてふきたるよし申せば、頼ミ申人心に思召様、いやしきふせ屋なれど心にくしと思召、ちと琵琶を仕れと仰られければ、祖父ハ琵琶をしらぶれば、姥ハ琴柱をたてならべ、ばち音つま音け高くして、秘曲を不レ残ひきし間、諸長心に思召ハ、我天下に於て琵琶・琴の奥義をことゞ〳〵く極めたると思ひ、入唐渡天せんと思ふ所に、日の本にもかゝる上手の有に、大国を伺ハん事、我ながらおろかなりと思召、あるじにもおんびんにしてかへらんとなされし所に、夫婦御袖にすがり止るを、扨御身ハいか成人ぞと問ハせ給へば、我レいにしへの弦上の御主村上の天王并になし壺の女御夫婦なり。御身の渡天止めんため、是迄顕ハれいでたる由御申被レ成、その儘失給ふ。左有に依て、先此度ハ都へ御帰り可レ有との御事なれバ、御供の用意被レ致候へ。相構へて其分心得候へ〳〵

枕慈童（十一ノ11）

尤慈童三通りあり。二通りハ、此末にしるす。シテノ流儀ニより趣替るべし。

厚板、そばつぎ、官人頭巾、腰帯、扇。

（底本二行アキ）抑是ハ魏の文帝に使へ申管人（ママ）にて候。扱も此君賢王に座すニより、吹風枝をならさず、民戸ざしをさゝぬ御代にて候。然バ魏の片原ニ麗懸山と申山有り。其谷川より薬の水流れ出し程に、ふしんをなし給ひしに、古しへ周の穆王に仕へ申せし慈童と申人、君の御寵愛の余り、あやまつて御枕をこへしが、其科に依て麗懸山に流し給ふ。去程に穆王は八匹の駒に召れ、仏より直に普門品の四句のげをさづかり給ふが、慈童をあわれミ給ひ、彼四句のげを御枕に書付給ハりけれバ、慈童ハ麗懸山の菊の葉に書つけ、毎日読誦し給ひしに、此四句の竭と申ハ、寿命長隠の要文なれバ、おのづから七百歳をたもち給ふ。其菊のしたゞり、なんりやうけんへ流候。此水をむすびぶく仕候へバ、息才延命にして何事も思召スまゝの御事なれバ、皆々なんりやうけんへ参り、薬の水をむすびてぶく被レ致候へ。又其上彼御枕を持て御出有リ、此君に捧げ御申有べきとの御事にて候間、皆々其分心得候へ〳〵

士　童　（十一ノ12）

（底本二行アキ）装束（ママ）同断。

か様に罷出たる者ハ魏の文帝に使へ申官人にて候。扱も此君賢主に御座ス故、吹風枝をならさず民戸指をさゝぬ御代にて候。然バ昔周の穆王と申て目出度御門座すが、慈童と申童を召つかハれしが、御てふあいのあさからざりし折節、かの慈童あやまつて帝王の御枕を越ス。公卿大臣是を見付、其罪太方ならぬ事なれバ、およそにしてハ叶ふ間敷と、種々様々に御評定有。其中にも或る古老の臣下進出て被レ申けるハ、是より百里の外に鉄剣山といへる深山有り。彼山に捨置べしと被レ申しを、此儀尤と御同心ある。左有に依て穆王よの常ならずあわれミ給ひ、一年霊鷲山にて釈尊法花経読誦の有し時、穆王は八匹の駒に召て法味を述給ふ所へ御参り有り、其時穆王普門品の四句のげと申を、直にさづかり給ひしを、則慈童に御相伝被レ成るゝ。其要文を菊の葉に書付、水にひたし毎日呑給ふに、此水不老不死の御薬と成て、七百歳をへ、今ハ報祖といへる仙人となり、只今是へ御出あり、菊水の目出度事共いろ〳〵御物語し給ひ、則薬の水を我君へ捧げ、寿命をさづけ申さんとの御事にて、慈童ハ其まゝ御帰りある。〈○依レ之只今勅使を可レ被レ立との御事也。皆々その用意被レ致候へ。相かまへて其分心得候へ〳〵

（底本二行アキ）〈○是に依て帝王かの山へ御幸被レ成、報祖が仙家をゑいらん可レ有との御事なれバ、百官卿相に至る迄、相構へて其分心得候へ〳〵〈トモいふ。〉

菊　慈　童　（十一ノ13）

（底本二行アキ）装束（ママ）同断。

抑是ハ漢の武帝に仕へ奉る官人にて候。扱も我君賢王

にましますにより、五日の風十日雨おだやかにして、政り事たゞしうましますにより、国土の民悦び申事数限り無ニ御座一候。誠に聖人の御代にハ仙人も山より出ると申が、夫ニ付爰に目出度事の候。いにしへ周の穆王の召つかわれし慈童と申者有。余りに王意に叶ひ申を、臣下大臣そねミ被レ申て、麗懸山に流されたるが、我七百歳をたもち仙人と成事、穆王に告の子細有て八匹の駒に乗り、霊鷲山に至り釈尊にま見へ、普門品の四句の竭を直にさづかり給ひ、毎日おこなひ給ふを、我等も君の御かたミと存じ、毎朝おこたらず菊の葉に書付、となへ申せバ、いつとなく七百歳をたもち、又鉄剱山より続く川有、此川の辺りにて菊の水を用る人ハ、寿命長穏成由申せバ、余りに奇特なる事とて、君南陽嶮へ御幸被レ成、仙人の住家をゐいらんあるべきとの御事なり。相構へて其分心得候へ〳〵

間之記　十二

○天鼓　○藤戸　○夜鳥　○山姥　○鵜飼

○阿漕　○野守　○鬲虫　○海人　○須磨源氏

天鼓（十二ノ1）

熨斗目、長上下、小サ刀。

〈ワキ呼出し、シテ柱の先え、〉

御前に候　〈老人をば私宅え帰し候へ　畏て候

〈シテノ後え行。〉

あらいたわしの事かな。方々の愁段ハ尤なれど、乍レ去爰ハ玉殿なれバ先御立ちやれ〈ト立テル。〉

〈両手ニ而シテノ腰ヲヲサエ立セル。〔シテの口〕シテ立テフリ向。橋懸りえ行、中入送り込。〉

実と年たけたる身にて一子を先立らるゝ事、勅命とハ申ながら、させる科もなきに闇々ふし漬にせられ、なげかる

丶ハ尤じや。殊ニ老てハ子に掛らんと末頼母敷思ハれ、其上世間の父母の習にて、数多持たる子の内にも壱人もおろそかにおもわればこそ

〈橋がゝり長候ハゞ、此末ヲいふ。三四間迄ハ此詞吉。〉

誠に皆人の不器用な子をも可愛く存、東西をわきまへぬ幼子さへ別おばかなしむに、増て成人の子をうしなひ、なげかるゝハ理りなれ共、其方の罪深きを助給ハん御法便に、仏菩薩の仮に親子と現じ来り、かゝるうき目を見せ給ふと思ひ、方々の後世を大事と能願ひ、逆縁なれども天鼓がぼだいを弔給ひ、又跡式の訴しやうあらば我等迄おしやれ、随分御取合そふずる間、先方々ハ私宅へ御かへりやれや

〈ト幕ノきハ迄送リ、帰リシテ柱ニ而〉

只今の老人が子の天鼓とやらん申者、玉殿の鼓仕れバ能き音の出たるが、余人のうてバ少もならぬに依て、其父に参り仕れとの仰にてあらふずる。然らバ子の打さへ聞事なに、まして親の仕らば嘸面白からんに、拙者も能聞て人に語らんと存、嬉うおもふたれバ、左ハなくして、当国の住人に王伯・王母といふ只何となき夫婦の民の有けるが、男子にても女子にても子を壱人ほしく思ひ、明暮仏神にきせいし、若ざかん成し時より正直を第一として、殊に慈悲心深く二親に孝有ゆへやらん、此以前ニも少の奇瑞度々有りといへど、其中にも有夜の夢中に天津ミそらより鼓壱ツふり下り、正しう王母が躰内にやどると見て、誰おこす共なく夢ハかつぱとさめし程に、扨も是は不思議成事を見て有物かな、惣じて夢といふものハ合事ハまれにて、十に九ツハ合ぬ物とは乍レ申、されども是ハ妙なるを見て有物哉と思ふ折節、無レ程王母懐胎し、十月の末にハ玉を延たる事く成男子を悦び、夢の告に任せ名をバ天鼓と付、いつきかし付そだてし所に、後にハ誠の鼓ふり下るを、打て見れバ心言葉に及ぬ程のしゆん音の出ると有るが、内裏迄隠なくして、ためし少き物なれば勅定として召れしに、誠にかれハ天命のつきたる故やらん、天鼓つゞみをおしミ深山え逃行を、数千の官人の以つてさがし出シ、彼者をバ路水の江にふしづけに被レ成、鼓ハ安房殿雲龍閣に籠置れ、音楽の役者の事ハ申に不レ及、公卿殿上人立替り遊バせども、終に前のごとく成音の出ざりし間、若鼓にきづがついてならぬか、扨ハ筒にひびきなどのいて音がとまつたか、但又中に何ぞいつても有かなどゝ、思ひ〳〵に御ふしん被レ成けるを、忝も御門聞召及せ給ひ、元より鼓ハ心なき物とハ申ながら、空よりふる程の神変の有上ハ、是ハ主の別れをかなしミ、ならぬ事の可レ有との宣旨にて、父王伯を召て打せらるれバ、又元のごとく、かんにたへたる音の出し故、人は高いも下いも親子の中程の事ハないぞ、あの心なき物さへ親子の間ハへだてなき迚、君辺の老若迄も御袖をぬらし給ふにより、老人をバ我等の承りて私宅へ帰し申た。いやよし無ひとりごとを申内に、思ひの外路次に逗留仕つた。先あれへ罷出申そうずる　〈トワキノ前へ行、下ニ居テ、〉

老人をバ私宅へ帰し申て候。扨も只今の老人の躰ハあわ

れな事で御座る。御存知のごとく此中如何成高位の人々まで、老た若いに寄らず遊してならぬ鼓が、父王伯が打て鳴様な不思議な事ハ御座ない。是に付ても人の親子の中ハ申ニ不レ及、親類までも大切な事成に、今の王伯ハ子に別れし老の身なれバ、何とぞして御取成を以て身命をつぎ、二タ親のなげきのやむ様に仰付られいかしと存る

（底本一行アキ）是こそ人口可レ然御意なれバ、管弦の役者を相ふれ申さうずる

〈シテ柱の少し先ニ而〉

やア〳〵皆々承り候へ。天鼓が事を不便に思召せバ、我君ハ路水の堤へ御幸被レ成、天のつゞみをすへ置、天鼓が跡を管弦講を以ツて御弔可レ有との御事なれバ、管弦の役者ハ相かまへて其分心得候へ〳〵

藤渡（十二ノ2）

（底本一行アキ）のし目、長上下、小サ刀。

（底本一行アキ）御前に候

（底本一行アキ）畏て候

（底本一行アキ）方々の愁歎な尤なれど、是ハ御前なれバ先お立ちやれ

（底本一行アキ）実と年老たる身にて成人の子を失ひ、なげかるゝハ余義なけれど、今ハ頼申人も不便ニ思召シ、又我等迄も別而痛敷存れども、最早帰らぬ道なれバ、此上ハふつつと思ひ切らしませ。又跡をば代に立させらるゝ様に、随分お取合セ申そうずる間、先方々ハ私宅えお帰りやれや

（底本一行アキ）扨も去年此所にての源平の戦を、思ひ出せバ今も恐しや。平家ハ数千艘の兵舟を浮メ此小嶋の前に居りしを、源氏ハ河の向ひの西川尻藤渡に旗を立られし程に、源平たがひに海岸をへだて陣を取給へば、船なくして越べき様も無所に、最前頼申人の御物語のごとく、兼而案内を問ハれ御存じの事なれバ、頼朝より被レ遣し足毛なる馬に乗り、家の子郎等を唯六騎相供し、海へさつと乗入給ふ時、某も誰にかおとるべきと思ひ、盛綱に付いて向の磯まで来りしが、藤戸を渡すと見て平家ハ舟をそば立、指詰引詰さん〳〵に射立し程に、我等ハ其まゝ取て返し、面白も無申事なれども、人足の仕置を致た。先あれへ罷出申そふずる

（底本一行アキ）只今の老女を私宅へ帰〔り〕申て候

（底本一行アキ）さん候。扨も只今の躰ハあわれな事で御座る。何れも親子の分レハかなしむ物とハ乍レ申、中にも今の老たる母の愁段ハ深く可レ有と存る。其子細ハ我子の案内者仕りたる故、先陣も被レ成、殊に当嶋を御拝領なれバ、此砌にハ如何成御褒美にも預るべき所に、さわなくして闇々と害せられ候事を、親の身としてなげき申ハ余儀なけれバ、一ツは後者の契略のため、又生残りたる母の思ひも失、亡者の恨のはるゝ様に、彼者の妻子を代に立させられ、なき跡をも御弔あれかしと存る

（底本一行アキ）是こそ人口可レ然御意なれバ、管弦の役者を相ふれ申そうずる

(底本一行アキ)
畏て候
(底本一行アキ)
やア〳〵皆々承り候へ。去年此所にてうしなわれし者の跡を、管弦講を以て御弔ひ可レ有との御事なれバ、管げんの役者ハ相かまへて其分心得候へ〳〵

替せりふ

是こそ人口可レ然御意なれ。其上(そのうへ)むなしくなりし浦の男ハ、我身の科無きに一命を失ハるれバ、恨の悪念などの若又残るとも、左様の御沙汰あらバ、成仏のそくわいをとげ、死(し)ての悦びをなし申そふずる。某別シて痛敷存る間、管弦の内をならバ何ぞ一役仕らふずるが、是ハ何と御座あらふずる
(底本一行アキ)
去ながら一円稽古仕らぬ事を致しても成まい。何をがな致そふずる。いや思ひ出して御座る。管弦過て定めて御酒が出ませう。其時分に大盃を持、御酒の相手になり申そふずる。先某の役は是に定メ、残りの役を相ふれ申そうずる
(底本一行アキ)
畏て候

右のせりふハ管弦の時申替りせりふなり。習也。ワキノせりふも同前言合。笛・太コ・シヤウ、先三ツヲ云なり。言合により今壱ツもいふなり。

鵺　(十二ノ3)

のし目、長上下、扇、短刀。
(底本一行アキ)
誰にて渡り候ぞ
(底本一行アキ)
尤お宿参らせ度ハ候へ共、方々の様成修行者ニ宿かす事ハかたき法度なれバ、思ひながら叶候まじ
(底本一行アキ)
いや〳〵私ニてハ成間敷候間、只日の暮ぬ先に何方へも御通り候へ
(底本一行アキ)
中々成間敷候
(底本一行アキ)
アラいたわしや、何れへがな留申そう。やれしゝ申、お宿参らせう。あの須崎の御堂へおりやつておとまりやれ。あれをかし申そうずる
(底本一行アキ)
いや某の立たる堂ニ而ハなく候
(底本一行アキ)
左様におしやつても夜な〳〵化物が上ると申ぞや
(底本一行アキ)
一段とすねい僧じやよ
(底本一行アキ)
夜前旅のお僧の宿かせと被レ仰られたを、須崎の御堂をおしへてやり申たるが、未だあれに御座るか、但又何方えも御通り有たるか。参つて見申そうずる
(底本一行アキ)
いや未だ是に御座候よ
(底本一行アキ)
中々さいぜん御目にかゝりたる者にて候
(底本一行アキ)
心得申候
(底本一行アキ)
扨御尋有度とハ、如何様成御用にて候ぞ
(底本一行アキ)
是ハ思ひもよらぬ事を御尋被レ成るゝ物かな。左やうの御事、しかと存も不レ致候。乍レ去初たるお僧の思召より御尋ね有を、一円存ぜぬと申も如何なれバ、承及たる通りあら〳〵御物語申そふずる
(原文判読不能)
「かな」以下十字分底本貼紙。

（底本一行アキ）
昔近衛院の御位の時、御門の御脳以テの外に御座候間、大法秘法の御祈禱にも不レ叶、博士を召てうらなハせらるれバ、うらかたを考へ申上る様ハ、是ハ偏に変化の者の業にて、夜な〳〵御殿の上迄来るよし申上るを、如何有べきとて公卿詮議被レ成るゝ所に、其中にも有知臣のの給ふやう、先帝にも去ためしのあれバ、武士を召て射させられよと有を、諸人一同に此儀尤と被レ仰て、源平両家の中を尋給ひて、中にも頼政といふ射手をゑり被レ出たるに、頼政の出立にハ、ぎよ龍の直垂を着し、しげ藤の弓にとがり矢二筋そへて持、郎等にハ遠江国の住人猪の早太といふずんどの早者を壱人つれ、内裏の大床に伺公し、良久敷またるゝに、案のごとく東三条の森の方より、黒雲一村立来り、御殿の上におゝいたるを見て、とがり矢を取てつがい、雲の中とおぼしき所をよつぴいて切てはなされたれバ、はつたと手答へして、御殿の上をよろめいて庭上へどうど落る所を、早太ハつる〳〵と寄て取ておさへ、鎧通しを以て九日つかれたると申
（底本二行アキ）
実と九刀が本で御座あろふずる。扨火をともし、能御らうじられたれバ、種々の者がばけたと申。先頭ハさる、どうハたぬき、目は柚、足は尺八、尾ハ長刀、鳴声が笛に似たとあつて、夫より彼の者の名を笛々と申げに候
（底本一行アキ）
夜鳥・笛、是も鵺が本で御座らふずる。か様の恐敷物をりやうじに捨おかれてハと有り、うつほ舟をつくり淀川へ流されたれバ、しばしハ此所に流れとゞまりたるとハ申せ共、委敷事ハ存も不レ致候。先ヅ我等の存ジたるハ如レ此に候
（底本一行アキ）
是ハきどく成事を被レ仰るゝ物かな。扨ハ此堂へ上る化物ハ、かの夜鳥の亡魂にて御座あらふずると推量致。余りに不思議成御事なれバ、弥難レ有御経をも御読誦被レ成、彼者の跡を御弔ひあれかしと存る
（底本一行アキ）
御用の事も候ハゞ被レ仰候へ
（底本一行アキ）
心得申候

山姥　（十二ノ4）

（底本一行アキ）
のし目、長上下、扇、小サ刀。
（底本一行アキ）
誰にて渡り候ぞ
（底本一行アキ）
さん候、善光寺え御参り有にハ、上道下道中道とて数多御座有。中にも上路越と申ハ、如来の踏分給ひたる道なれバ、余の方を十度御参のあるよりも、是を一度成共御通りあれバ、仏の御内證にも御かなひ有により、古身の弥陀唯心の浄土にたとへられて候。乍レ去難所なれバ、御乗り物は叶わぬ道にて候
（底本一行アキ）
心得申し候
（底本一行アキ）
是に候
（底本一行アキ）
我等も用所候へ共、女性上臈の連て御参りならバ、案内者仕らふずる

急御同道被レ成候へ
（底本一行アキ）御覧ぜらるゝごとく、ヶ程の難所なれば御乗ものなどハ叶わぬ道にて候。あらふしぎや何とやら日の暮るゝ様に御座る。拙者も自分の用所有て行か、又ハ人に頼まれてもせつ〳〵通り申が、かゝるふしぎ成事ハ無二御座一候
（底本一行アキ）いや此山中にハ泊りのない所で御座る。いや兎角申内に、日の暮て前後をわきまへず候
（底本一行アキ）あれ〳〵お宿と申、急でからせられい
（底本一行アキ）今迄闇であつたがまた夜が明たよ。先あれへ罷出申そふずる
（底本一行アキ）扨も只今ハ不思議なる事にてハ無二御座一候か
（底本一行アキ）是ハ面白事をお尋被レ成るゝ物かな。先世上にあまねく取り沙汰いたす。山姥にハ尾花が成と申候。
其子細ハすゝきハ後に事なそふずるといふ心にて、大地の底より思ひ合イ、一村ヅゝ生茂り、春にも成れバ陽気を請そろり〳〵と葉を出すが、其葉がよれあふて左右の手となり、穂の出たるが白く乱て山姥の髪となり、風に吹れてうごくに依て、山姥にハ尾花が成と皆申候
（底本一行アキ）実と尾花の分にてハ成まじく候。又去ル人の咄シ被レ申たハ、山姥にハ団栗が成ると申候。
大木の木の実がじゆくして枝より落る時、谷へころり〳〵とこけ集りて寄合、談合いたし五躰と成るに、其中にも大きながまなこと成に依て、どんぐり目と申も此子細にて有げに候
（底本一行アキ）誠に何とやらが山姥に成と申た。ヲ、夫レ〳〵、草翁が成と承り候
（底本一行アキ）いわれこそ御座れ。草木の根もと土のそこに有物なれバ、大雨ふり山川に水の出たる時にあらわれ出、雨露にさらされ髭の白く成たるが山姥の白がと成、自然と性根が入てうごくに依て、是が山姥に成と申候
（底本一行アキ）語れと被レ仰るゝ程に聞及びたる程の事を申せバ、夫ハ左様にてハ有まいの、是ハ誠しからぬ事などゝ有により、我等も咄シかゝり迷惑いた〳〵。乍レ去誠の山姥にハ何やらが成と申た。今思ひ出いた。正身の山姥にハ山にある木戸が成よし承候。
山中の田地にハけだものを入間敷ため垣をいたし、主の出入口にハ木戸を仕るに、其垣が胴躰と成、木戸が則口と成ゆへ、山姥ハ山に住木戸じやと申候
（底本一行アキ）木戸・鬼女、実と是は鬼女が本で御座らふずる。扨只今ハ何と思召して、山姥の事をお尋被レ成たるぞ。ふしんに御座候
（底本一行アキ）扨ハ是に御座候が、天下に無レ穏百摩山姥と申遊君と有れバ、正身の山姥は曲舞を見度思ひ、俄に日を暮し留置たるかと存る間、か様の恐ろしき者の思ひ入たる事を、只御通り有てハ御行末が大事なれバ、是にて哥の一節を御所望あり、其後如来へ御参りあれかしと存る

（底本一行アキ）然らバうたわせ御申候へ。我等も是にて承らふずる

鵜　飼　（十二ノ5）

（底本二行アキ）誰にて渡り候ぞ
（底本一行アキ）尤お宿参らせ度ハ候へ共、方々の様な修行者に宿かす事、かたき法度なれバ、思ひながら叶ひ候まじ
（底本一行アキ）イヤ〳〵私にてハ成間敷候間、只日の暮ぬ先に何方へも御通り候へ
（底本一行アキ）中々成間敷候。あらいたハしや、いづれにがな留申そふやれ。

しゝ申、御宿参らせふ。あの須崎の辻堂へおりやれ。あれをかし申そふずる
（底本一行アキ）いや我等の立たる堂ニ而ハ無二御座一候
（底本一行アキ）イヤ左様におしやつても、夜な〳〵光り物が上ると申ぞや
（底本一行アキ）一段とすねい僧じやよ
〈中入後〉

夜前往来の僧の宿かせと被レ仰たを、須崎の辻堂へおしへてやり申たるが、未ダあれに御座るか、参つて見申そふずる。

（底本一行アキ）イヤいまだ是に御座候よ
（底本一行アキ）中々夜前御目にかゝりたる者にて候
（底本一行アキ）常之通り
（底本一行アキ）去程に此伊沢川と申ハ、昔より川の上下三里が間ハ堅く〔せつせうきんぜい〕殺生禁製の所なるに、是より下岩落（ママ）と在所の者、夜毎に忍びのぼつて鵜を遣ふ由風聞致すを、在所の老若聞付申されけるハ、この浦の殺生いたさぬとある事ハ、遠き国迄も流布仕るに、当所の者をあるかなしにいたす事、あまりにくきやつなれば、何卒してとらへて後代のためしにふし漬にいたそふずるとて、深く隠して夜な〳〵待をバ夢にも知らず、ある闇の夜、よふけ人しづまつて後、いつもの鵜遣ひ真鳥をはなちつかふ所を、ねらふ人々左右よりいちどに出て、彼重科人をむづと取らへ、汝ハ此あたりの者をあなどり、堅き法度の事にてすなどりを致ス事、前代未聞の曲事なりとしかりけれバ、其時盗人の魚翁こたえていふやう、某も近郷に住者とハ申ながら、左様の殺生きんぜひの川とも存ぜずして、皆人に異見おも可レ申老の身の、天命つきかゝるりやうじ成事を仕、今ハ一段迷惑致ス。乍レ去此度ハ我等の命を御助あれ。是よりハ御意次第に致そふずるとわびけれど、理非をもきかぬ若者共ハ、やにハにせいばいせうずるといふ者もあり、走りかゝつてさん〳〵に打人も有を、去人見付皆々にいけん申様、如何に科人成と左様にないためそと言て、あたりの人をのけて広く置、大竹を取に遣り、一間程づゝにきらせ、二ツづゝに割たるを三所あミて、其すの上にかの鵜遣ひをゆるりと寝させ、片はぢよりきり〳〵と巻て、つよき縄をもつて五ツ所しつかとしめ、両のはしに大きなる石を二ツ結付、一切他生の利に任せ、所も替ず伊沢川のふちへざんぶとはめたハ、なんぼ

うおとなしき異見ニ而ハ無二御座一候か

（底本一行アキ）是ハ奇特成事を被レ仰るゝ者哉。扨ハ此堂へ上る光り物ハ、彼鵜遣ひのぼふれいにて御座あらふずる。夫をいかにと申に、かの者ハ此世にて殺生をいたし、罪深き身なれバ、一扁の御回向にも預り度思ひ、かりにあらハれ出、ごうりきの鵜を遣ふて御目にかけたると存る間、難レ有御経をも御読誦被レ成、重てきどくを御覧あれかしと存る

（底本一行アキ）左様に候ハゞ、我等もともに石をひらふてまいらせうずる

（底本一行アキ）心得申候

阿漕（十二ノ6）

（底本一行アキ）是ハ伊勢の国阿漕の浦に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれバ、罷いで心を慰ばやと存る

常之通

先此所ハ伊勢の国阿漕が浦と申て、無レ隠名所にて候。其子細ハ忝も天照大神の当国へ初て御光臨被レ成し以後、この辺ハ御膳調進の網を引浦なれバ、いづれを神慮にもるゝ物の無故に、山谷江河の鱗此磯に集るを、世を渡る近郷の海士ども是をよく存、思ひ〳〵に縁をもつてすなどりを望けれど、誰も神罰とおそろしく被レ存、未だ是をゆるし申さぬ所に、爰に心底の拙なき魚人のあつて、忍びて夜な〳〵網を引。初メの程ハ一円に人の知らざりけれど、度重に随て、有者思ふ様、かれほど能魚を数多取物ハ無と心中に如何斗り浦山敷ぞんじ、朝暮心を付て見るに、当浦成しを、壱人知れバ悪事千里と世上にぱつと沙汰の有て、在所の老若聞付被レ申けるハ、此浦の殺生致さぬといふ事ハ近国迄も其隠れなきに、殊に当国にありながら大神宮の不レ恐、且かつうハ此里の者を有か無に致ス事、余りにくきやつ成バ、何卒してとらへて後代のためしにふしづけに致そうずるとて、深くかくして夜殊にまつをバ夢にも知らず、ある暮に月入、人しづまりて後、沖にハ舟も見へず、陸に余人ハなきと存、いつものごとく網をおろし引所を、ねらふ人々左右より一度に出て、走りかゝつて阿漕をむづと取らへ、はやりたる若者共ハやにハにせいばいせうずるといふを、此重科人の唯ころさんなおしけれバ牛ざきに致そうずるなどゝ種々に申を、在所の年寄が、いや〳〵当国ハ神国成に、左様に昔より例なき事ハ如何と申て、長くすまきにして大なる石を二ツ結付、所もかへず其あミを引たる此浦の沖中へ、一切他生の利に任せふしづけに仕りたるを、古しへの哥人ハ能被レ存、哥に、伊勢の国阿漕が浦で引網も度重れバあらわれにけりと、か様によまれたる由承る。先我等の存たるハ如レ此に候

（底本一行アキ）是ハ奇特成事を被レ仰るゝ物かな。誰あつて罷出、左様の御物語いたそふずる者、此あたりにてハ不レ覚候。扨ハ我等の存ハ、一扁の御回向にも預り度思ひ、阿漕の亡魂顕れ出、声詞を替されたるかと存る間、余りに不思議成御事なれバ、暫く是に御逗留あり、重て奇特を御覧あれかしと存る

（底本一行アキ）御用の事も候ハゞ被レ仰候へ
（底本一行アキ）心得申候

野守（十二ノ7）

（底本二行アキ）是ハ和州春日の里に住者にて候。今日ハ春日野の他りへ罷出、心を慰ばやと存る
（底本二行アキ）先野守の鏡とハ、すなハち是成池を申。夫をいかにと申に、御覧ぜらるゝごとく、なりも鏡の様に丸くして、さながら曇りもなく影のうつるに依て、野守の鏡とハ申げに候。又去人の御雑談被レ成しハ、いにしへこの春日野を守る者の有しが、いつも野を守りに出申時ハ、是成池水にて我かげを移し、姿を能見たるゆへに、則野守の水とも申。又一説にハ、昔し有賢王の有しが、当国において御狩を被レ成し時、秘蔵の白ふの鷹を失なハれ、爰かしこを思ひ〳〵に尋ねあるき、折節是に野守の翁の有し程に、御鷹の行衛を見て有かと仰られけれバ、かの者頓て答へて申やう、御鷹ハあれ成水の底に有よし申を、知ぬ者とておかしき事をいゝつるかなと、目を引、指をさいて御わらいあれバ、其時かの翁大きに腹をたち、左様に偽りと思召におゐてハ、御出有御らんぜよと申ニ付、狩人我レ先にと走り寄見給へバ、実もかれがいふごとく、水の底にそれたる鷹の有をふしんに思召、暫く心を付て御らんずれバ、水底にハなくしてそば成木に鯉を取つていたるを、今の者ハあどなき事を申たるげに候。扨大宮人ハ御鷹をすゑられ、悦びいさみて御帰り有たると申。是に依て哥にも、はし鷹の野守の鏡ゑてしがな思ひ思ハずよそながら見んと、か様によミ給ひたる由承り及び候。又誠の野守の鏡ハ、此塚の内に鬼神の住けるが、其鬼の秘蔵致して持たるこそ、正身の野守の鏡成よし申。夫を如何にと申に、かの鬼神ひるハ〔の昼ハ〕人と現じて此野を守り、夜ハ鬼と成て是成塚にかくれ住に、その鬼の三千世界しゆミ迄移す常張が、誠の野守にて御座候よし承る。去ば野を守る鬼の鏡成に依て、是が本説にて御座〔あら〕有ふずるとの御事に候。惣じて此春日野において、飛火の野守と申ニ付、数多子細の有とハ申せ共、先我等の存たるハ如レ此に候

常之通り

扨ハ我等の存るハ、旁の行力達し給ひたるゆへ、此塚に住鬼神野守と現じ、声詞をかハしたるかと存る間、余りに不思議成御事なれバ、とてもの事に一ト祈り御いのり被レ成、鬼神の誠の姿を御覧あれかしと存る

融（十二ノ8）

（底本一行アキ）のし目、長上下、短サ刀、扇。
是ハ下京辺に住者にて候。今日ハ物さびしき折柄なれば、河原おもてへ立出、心を慰ばやと存る

常之通

昔人王五拾二代嵯峨の天王の皇子とふるの大臣と申せし

御方、父母の御寵愛かぎりなかりし故、古来にも聞及ぬと有程に種々様々の御遊覧の被レ成るゝ。春の花・秋の月、千草にすだく虫の音、詩哥管弦琴碁書画ハ申に不レ及、有時ハ鷹をつかハれ、鹿を狩、又次の日ハ池を掘、山をつかせ、其高山にハ古木大木を植置れ、朝夕立さらず御覧あるとハいへど、是も一たん面白く思召て、重てもて遊び給ふことも無二御座一候。或時大臣被レ仰るゝ様ハ、何にても世に替りて珍ら敷事や有、見て慰度と御意被レ成しを、去ル人御前にて語り被レ申たハ、陸奥の千賀の浦はの躰、世に越へて詠一入のよし被レ申たるを、則御覧被レ成度思召セど、これよりハ遠路にて御下向も叶ハざれバ、思召出され此六条河原の院へ千賀の海方少もたがわず移され、三千の人足を三手に分て、津のくに三津の浜より毎日うしおゝ汲マせ、塩時を待て一同にあけし程に、誠に指くるうしをの如くに有たると申。されども塩焼有様なくてはとあり、此河原の院へ浜をならし塩家を立テ、風もしづまり日もうらら成る折節ハ、皆海士人の出て塩を焼に、さすが花の都の事なれバ、宮殿らうかくの内よりも、塩屋の煙のほそく立上る躰を、見る人毎に面白ふ被レ存て、行来の人も立留りたると申。又あれ成ハ陸奥まがきが嶋を写され、いつもさぶハ御船に召て御出あり、思ふ友どち御遊び被レ成たると申。其刻業平の哥に、塩竈にいつか来にけん朝なぎに釣する舟も爰によらなんと、か様に遊バされたると申。されども大臣むなしくなり給ひて後、相続して持テ遊ぶ人も無二御座一候ニより、今ハか様に名のミ斗りにて候。其後貫之ハ立寄、一首の哥に、春まさで煙たえにししほがまの浦さびしくも見へ渡るかなと、作意を種々によまれたると申。先我等の存たるハ如レ此に候。

（底本一行アキ）近頃奇特成事を仰らるゝ物かな。左様に何国共なく老人の罷出、か様の御物語致そふずる者、此傍りにてハ覚へず候。扨ハお僧の御心中貴う御座ニより、融の大臣の御亡心あらハれ出、声詞を御替し被レ成たるかと存る間、余りに不思議成御事なれバ、暫く是に御座候ひて、重て奇特を御覧あれかしと存る

（底本一行アキ）御用の事も候ハゞ被レ仰候へ

（底本一行アキ）心得申候

海人（十二ノ9）

熨斗目、長上下、短刀、扇。

〈呼出シ、高砂同断。〉

（底本一行アキ）先あれに見へたるハ海人のゝ里とて、古しへあま人の住給ひし御在所にて候。又是成を新珠嶋と申子細ハ、昔天智天王の御時、淡海公の御妹ハ唐土高宗皇帝の后に立せ給ふ。然るに南都興福寺ハかの后の御氏寺なるにより、大唐より種々の宝を渡さるゝ。かげんけい・洒浜石・面向不背の玉、中にも面向不背といふハ、玉中に釈迦の像ましますを、何方より参りておがミ奉れど、同じごとくの御面像を拝申に依て、面をむかふにそむかずと書て、面向不背と申習ス。

此内弐ツの宝は京着し、名珠ハ此沖にて龍宮へ取られしを、大臣どの此玉をふかくおしませ給ひ、当浦へ忍びて御下向有、賤しき海人乙女と契りをこめ、無レ程一人の男子を悦び給ふ。其折節大臣殿海士人え仰られける様、此沖にて龍女のしづめし名珠をかづき上よと御申有しかバ、安き間の事玉をバ取上申べし。然る上ハ今の御子を世続にと望まれしを、則御同心被レ成し故、扨ハ我子故に捨ん命ハおしからじと、千尋の縄を腰に付、其儘海中にわけ入給ふが、やゝありて水底の縄うごきけれバ、すハ約速のなわこそゆるげとて、上にまちたる者共ハ我先にと取付引上ゲ、是成嶋にてかの玉を初て見そめたるに依て、所をも新珠嶋とハ申習ス。か程の名珠を二度目の本の宝となし、興福寺に納メ置れたるも此故にて候。されども海人びとハ龍神の見入けるか、無レ程むなしく成給へども、御契約の事なれバ、御子ハ世継の位に備ハり、今都に房崎の大臣殿と申て御座候も、此子細にて有げに候。先我等の存ジたるハ如レ此ニ候

（底本一行アキ）左様の御方とハ存ぜずして、只今ハりやうじ成事を申、めいわく仕候。

（底本一行アキ）畏て候

（底本一行アキ）やあ〳〵皆々承り候へ。房崎の大臣殿此所へ御下向も、御母海士人の御追善の御為なれバ、一七日のあいだハ浦々の網をも上、殺生堅く禁断と被ニ仰出一てある。又御跡をバ管弦講をもつて御弔ひあるべきとの御事なれば、官弦の役者ハ相かまへて其分心得候へ〳〵

須磨源氏（十二ノ10）

（底本一行アキ）熨斗目、長上下、短サ刀、扇。

是ハ津の国須磨の浦に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれバ、浦へ罷出、心を慰ばやと存る。又若木の桜今を盛なるよし申間、立越詠ばやと存る

常之通り

去程に此所ハ須磨の浦と申て、無レ隠月の名所にて御座候。又是成木を若木の桜と申て、名木にて御座候。其子細ハ、昔し平家の君達薩摩の守忠度ハ、此所に住給ひし時に、手づから植置れたる桜成よし申、又一説にハむかしより若木の桜と申て御座ありたる共、二せつに承り及び候。去程に光源氏暫くこの須磨の浦に御座ありし時、明ケ暮須磨明石の月を詠メ、御心を慰め給ひしが、都より帰洛有べしとの御事にて、則御上洛被レ成、官位ほうろく世にたぐいなく、藤の裏葉にて太夫天王、光君と申奉りたる由申。其外此浦に付て色々面白事共有げに候得共、委敷事ハ存も不レ致候。先我等の存たるハ如レ此に候

（底本一行アキ）言語同断、奇特成事を被レ仰るゝ物かな。左様に何国共なく老人の罷出、光源氏の御物語可レ申者、此傍りにてハ不レ覚候。是ハ我等の推量申ハ、古しへ此所に光源氏住せ給ひし所成れバ、御心を残し置れ、源氏の御亡心頭ハれ給ひ、声詞を御替し被レ成たるかと存る間、余りに不思議成

御事なれバ、暫らく是に御座候ひて、重ねて奇特を御覧あれかしと存る

間之記

○元服曽我
○調伏曽我
○禅師曽我
△切兼曽我
○小袖曽我

元服曽我（十三ノ1）

はやし方出ルト、ワキ出ル。付テ出テ、太コ座ニ居ル。
但、太刀持成バ、笛ノ上ニ居。シテ・ツレ出、次第・
道行過て、一ノ松より案内乞。
誰ニて渡り候ぞ
左有ば其由申さうずる間、夫ニ暫く御待候へ
ワキノ前へ行。
いかに申上候。只今祐成の御登山にて候
さん候
畏て候
御出の由申て候得バ、此方へ御入有と被ㄴ申候

（底本一行アキ）御用の事も候ハゞ仰られ候へ
（底本一行アキ）心得申候

十三（十八）

○夜討曽我
○竹の雪
○籠太鼓
○鶏龍田
○千引

ト太コ座ニ居。シテ・ワキいろ〳〵謡有て、ワキ呼出。
御前ニ候　畏て候
ト云テ、シテ柱ノきわへ行、幕ノ方向、
いかに箱王殿へ申候。別当殿より召れ候間、急ギ御出候へ
少し立テ居、箱王シテ柱へ来ルト、ワキノ次ニ居る。
夫よりいろ〳〵有。シテ・ワキ別れて、ワキ楽屋へ入
ト同入。又、サシ・クセ済と、ワキ出ル、同出ル。
是ニ候
太方（ママ）人宿りの辺まで、御出有うずる
此詞なくてもよし
畏て候

ト云テ、ワキノ後ろを通りて一ノ松ニテ、
早ばつくん御出有ふずる。急で追付申さうずる
シテ柱ヘ出テ、シテ見テ
未是に御座候。いかに申上候。別当是迄被レ参て候
シテ・ツレ出向い、ツレ、シテヘ云テ又狂言へいふ。
心得申候
ト云テ、ワキへいふ。
此方へ御入有と被レ申候
ワキ通ル〔側〕、同笛座ノ上ニ居。ワキノ側へ太刀を右ノ方へ置、切ニ付入。
太刀持成バ是ニてよし。太刀なくバ、太刀をシテ方より出し有也。
太刀持問事。〔太は〕
太刀不レ持時ハ、有所（マ）と脇の側へ置（マ）、尋候事。
但、ワキ中入後ニ太刀持出ル事も有。

嶋物、無地のしめか、くゝり袴、水衣、腰帯、合仕頭巾。

調伏曽我（十三ノ2）

御前に候　畏て候
扨々武士（ものゝふ）の子ハ、幼少より格別で御座る。只今箱王殿の太刀追取て出給ふ吉相、中々恐ろ敷躰で御座る。先同宿を呼出し申そう。新発意おりやるか　何事ぞ　わごりよは是程夥敷事を何と知らしませぬか　いゝやしらぬ　然らバ語つて聞せう。扨も右大将頼朝御登山被レ成るゝニ付、何が東八ケ国の諸士車座ニ居ならび列座の躰、事も夥敷見物なれバ、箱王殿も此由を御覧じのたまいけるハ、序に御供の衆の名苗字を仰聞させられよと有ヲ、安き間の事申て聞せうずるとあれバ、先一番に風折召れ念珠（ねんじゅ）け高ク見へ給ふハ鎌倉殿ニ而御座候。中々あれこそくわほういミじき兵衛（く）の佐殿よ。左りの上座ハ、御舅北条殿。左り巴ハ、宇都の宮。右巴ハ、小山の判官友綱。松皮ハ、小笠原（タリ）。扨又中座の一番ハ、諸士の別当梶原父子。紅（こう）の直垂二人ハ誰そ。壱人の大男ハ和田の左衛門、今一人ハちゝぶの重忠。其次に月出シたる扇つかいハ、あれこそ工藤一郎と迄仰られ、そこで思ひ当た。じつとおひかへやつたれ共、さすが利はつの箱王殿の事成バ、其儘助経かとおとがめやつたを、さらぬ躰にてもてなし、いろ〳〵せいし止め給ひ、御かへり有道すがら、頼ふだ人さゝやいて申されけるハ、誠左様に思し召さば我等の調伏、と迄聞たれども、くわしき事ハしらぬが、其儘檀（ママ）を餝れと仰せ付られたが、何様心元ない事でハ無か　誠に是は気遣ひな事じや　先急でだんのかざらう　能ろう
だんをかざりて、ワキ出ルト前へ行。
いかに申上候。護摩だんをかざり申て候
大蔵ニてハ一人出テ語り、急でだんをかざり候へ、と
いふて入。
高安流、中入の時、はしがゝりにて呼出ス。狂言ハ云

て、だんを餝り、太コ座ニ居、ワキ出ルト前へ行、
いかに申上候
といふ。但、橋がゝりへワキ出ルトいふか。

禅師曽我（十三ノ3）

太夫禅師（ママ）ニ出ル跡へ出ル。太夫名乗、舞台の中ニテ呼。
御前に候
護摩堂の戸を開キ候へ
畏て候
狂言柱ニ付と、ワキ・ツレ四人斗り出て、橋がゝりへ
来て、案内ヲ乞。
案内とハ誰にて渡り候ぞ
脇伊東九郎祐宗ニて候。急で門ヲ明候へ
畏て候
ト云テ、シテノ前へ出テ、
いかに申上候。伊東の九郎祐宗の御出にて候
此方へと申候へ
畏て候
立テ、シテ柱と目付柱の間より一ノ松の方向て、扇開
きて
さら〳〵〳〵
ワキノ方ヲ見テ
こう〳〵御通り候へ
嶋物か無地か、へんてつ、くゝり袴、合仕頭巾、扇、腰
帯。
又曰、
初メ母出、シテ・ツレ出、台出ル。シテ出ルト其跡へ
付て出ル也。
御前に候　畏て候
護摩台、大臣柱の方ニ有。扇を開き、台の側へ行て、
さら〳〵〳〵
ト云テ開キ、其儘片ひざ立テ居テ、
護摩堂を開き申て候
ト太コ座ニ居ル。
ワキ出テ、一セイ過て案内乞。
誰にて渡り候ぞ
心得申候
いかに申上候。祐宗の御参にて候
畏て候
こう〳〵御通り候へ
シテ・ツレ、文持出ル。ツレト入替リ、太コ座ニ居。
又曰、
こう〳〵御通り候へ
ト云テ太コ座ニ付。ワキ通りて詞有。末ニ、
敵を討、其身も即座ニ討れて候
ト云時ニ、狂言文を持出テ、
いかに申上候。曽我殿より（の）御文の候。御覧候得

ト云テ、シテへ渡し、太コ座ニ居、シテニ付テ入。
右云合次第、委敷問べし
（底本一行アキ）
又曰、
扨々目出度事かな。御祈禱が有やらん、護摩堂を開けと被ニ仰出一た。急いで開こうずる
両手をかけて、両方へ開くてい
ごと〳〵〳〵、ぎい、ぐわら〳〵〳〵
護摩堂を開申て候、トモ。

切　兼　曽　我　（十三ノ4）

シテニ付て出。間、壱人。ワキ梶原、楽屋より出。太刀持一人。橋がゝりニて、ワキ供
御前に候　畏て候　いかに此内へ案内申候
シテノ供
案内とハ誰にて渡り候ぞ
ワキノ供
梶原源太景末にて候。御目にかけ（かゝり）度由申候。此由御申有て給ハリ候へ
其由申さうずる。夫に暫く御待候へ
（底本一行アキ）
いかに申上候。梶原源太景末の御出ニて候　畏て候
最前の人の渡り候か。其由申て候へば、かう〳〵御通り
あれとの御事ニて候　心得申候
かう〳〵御通りあれとの御事にて候
中入に供して、両人とも入。

小　袖　曽　我　（十三ノ5）

ワキ出ルト、付て出、笛座ノ上ニ居。
御前にさむらふ
畏て候
ト元ノ所ニ居。
シテ祐成・ツレ時宗出て、次第謡過て案内乞。
誰ニて渡り候ぞ。いや祐成殿の御参りニて候。大方殿よりの仰ニハ、祐成殿御参ならバ申せ、時宗の御出成バな申そと仰られ候が、旁の御出の由申さうずる
心得申候
いかに申候。（上候）祐成の御参りにて候
心得申候
此方へ御通り候へ
ト云テ笛ノ上ニ居。いろ〳〵謡有、地へ取て末に、
なつかしけれバさりやらず。
此謡の内ニ呼出スゆへ、不レ聞。心へてよし。
御前に候
心得申候
此請ル詞の内ニ兄弟いろ〳〵詞。末ニ、
時宗猶々勘当、
ト云と、
いかに祐成へ申候。時宗の事を御申有ば、祐成ともに勘当と仰られ候間、左様に御心得候へ

ト云テ笛の上ニ居ル。後に太方(マヽ)ニ付入。
宝生流ハ太刀持出ル故、狂言いらず。

箔、女帯、びなん、末広持也。

夜討曽我（十三ノ6）

やる舞ぞ〳〵　のがすな〳〵　わごりよハ何としてわせだぞ　いや某ハ何心もなふ寝ていたれば、寝耳に風とわめく音がした処で、そちがやる舞ぞ〳〵と云程に、先のがすな〳〵といふたが、扨是ハ何事が出来たぞ　扨ハ様子を知らぬか　いゝや　其義ならば語て聞せふ。先今夜の夜打の〈○〉印へつゞく

壱人の時ハ

是へ罷出たる者ハ、鎌倉殿(くら)の御内去(さる)御方ニ使へ申者ニて候。某の是へ出る事余の儀にあらず。今夜の夜討〈○〉のおこりと申ハ、伊豆の国の住人伊藤の入道助近に、工藤助経が先祖の本地をおうれうせられ、何卒して彼伊藤入道を討んと便りを伺ひ待所に、一とせ頼朝を慰め奉らんとて、伊豆相模武蔵の三ケ国の諸侍、赤沢山奥野の狩りを催し、夥敷遊舞を尽し酒ゑんのなし、種々様々のきやう応をなし、彼河津亦野(また)が角力も此時なり。か様の時節能折柄と思ひ、助経が普代の郎等近江八幡に心を合、何卒して討んとせしが助近(おか)をバ打もうし、嫡子河津の三郎祐重を念なふ射落(いき)しぬれば、其子に一万箱王とて兄弟の者(もの)の有しが、幼(きとて)くて父に分れ、爰かしこにたゞよひいとけなければ、母のつれて相模の国の住人、曽我の太郎助信が所へゑんにつきしきざミ、兄弟の者は幼少ニて父を討せ、何さま父の敵を討んとたくみしが、今成人して曽我の十郎祐成・五郎時宗とて、並びなき大剛の者なれバ、此度祐経の屋形へ忍び入、今夜本望をとげられたるとハ聞たれども、定説ハしかとハ知(しら)レぬ。〈△両人の時ハ印へつゞく〉誠に是がぜうなれば手柄な事でおりやる。〔御座る〕〔定て偽りで御座ろうと存れど、夫も知ぬ事じや〕

やア〳〵其元のにぎやかなハ何事じや。何といふぞ、五郎・十郎が是へ討てくるといふか。かの両人ハ大剛の者なれバ、某などのとらへられたらば中々働く事ハ成まい。某ハかへろう。乍ル去是迄来て只帰るも如何なれば、此様子を触てのこう。やア〳〵皆々承り候へ。今夜の夜討の輩ハ曽我兄弟の者なれば、面々の屋形の前にかゞりを焚、辻々をかため、番を能仕れとの御事なり。相構へて其分心得候へ〳〵

早鼓の時ハ、狂言上下、右ノ方肩ぬぎ、竹杖。〔二人弓〕二人の時も同断。但し、一人ハもぎどう。又ハ一人鑓、一人ハ弓ニてもする。

（改丁）

両人の時の留メ

〈△〉誠に是が定なれバ手柄な事でハないか　実と是ハ手がらな事じや

ヤア〳〵そこ元の賑かなハ何事じや。何といふぞ、五郎

・十郎が是へ討て来ると云か。扨も〳〵是ハ何として能ろう　のふ〳〵両人ハ大剛の者なれバ、爰元にうろたへて居て、しぜん切られてハ成まい。急でのかふ　是ハ　さア〳〵おりやれ〳〵　心得た

（底本一行アキ）

又曰

アドヤア〳〵其元の賑かなは何事じや。何といふぞ、五郎・十郎が是へ討て来る　ヲモ何といふぞ　アド五郎・十郎が是へ討て来るといふ　ヲモ夫成バ和御料を頼む程に、某を連れていてくれい　アド某壱人さへ心元ないに、そなた迄何として連て行るゝ物か。夫に居さしませ　ヲモ是々身共をもつれていてくれい

竹の雪（十三ノ7）

初メワキ出、名乗て呼出ス。

いかに渡り候か

狂言女みづからを呼バせらるゝハ何事ニて候ぞ　ワキ詞有。末ニ、竹の雪をはらハせて

何と物詣でと候や。竹の雪の事ハ心得申候。又月若殿をいたわれと仰候が、いつの御留守ニてもミづからのいたわらぬ事の候ぞ　ワキ、去ば頓て下向申そふずるニて候　頓て目出度御下向候得

大臣柱ノ方へ行、ワキ幕へ入ト、舞台の真中へ立て

扨も〳〵腹立や。又月若が告口を仕たと見へた。

いかに月若の渡り候か。申べき用所有ぞ。急ぎ出られ候へ

子方幕より出ル。女ハ真中ニ立居ル。子方橋がゝり真中へくると、

のう腹立や、早う参られ候へ

子方、シテ柱へ出ルト、側へ寄て、

のう月若殿お聞候へ。父ハ四五日物詣でとて御出候。御留守の内、月若殿を能々慰め申せと仰られた。いつのお留守ニても自があしき様に当りたる事ハ候ハぬが、何とて左様にむりをば仰せらるゝ。惣て左様に仰候ば、世の常ニてハ置れ申まじいぞ。能心を付られ候へ。あの顔ハいのふ、腹立やの〳〵

子方をつきたおして楽屋へ入。子方謡有。シテ掛合有末に、

親子ならでハかくあらじ、〳〵

ト謡終ると、女狂言の供をつれて、橋掛ニていふ

あら不思議や、月若が見へぬ。いづくへ行て有ぞ。定て長松の母の所へ行たる物で有う。扨々腹の立事かな。いかに誰か有　御前に候　月若が見へぬ。定て長松へ行て有う。汝行てつれて来り候へ。童が呼と有ば来るまい。殿のお召被レ成るゝとだまいて、急で呼で来り候へ

心得申候　女ハ太コ座ニイル。シテ柱の内へ入て、供ハ

いかに案内申候。是に月若殿の御座候か。殿の御召ニて候。急で御出候へ　ト云テ下ニ居て、子方の供して入。シテも入ト。

女、シテ柱へ〔の〕立ていふ。

扨々殊の外隙〔マヽ〕が入と、何と致ておそい事か、腹の立事で御座る　笛の上ニイル。供出て云。

いかに申上候。月若殿を御供申て候
いかに月若。能所が有と思ふて、長松へハ何とて行ぞ。長松ニテ嘸ミづからが事のミ申つらん。のう腹立や、何と致た物で有うぞ　ト云テ
後見座より笹を持出て、子方ニ渡ス
父御の仰せ置れ候ぞ。上のきぬをぬぎ、小袖一ツにて、是を持て此□（底本一字空白）の竹の雪を払い候へ
共雪濁りたらバ能事ハ有まいぞ。構て其分心得候へ。何（ママ）れを何と致た物で有うぞ
ト云テ幕へ入。子方謡有。末に、
思うかいなき月若ハ、ついに空敷成りにけり、〳〵
子方ハ作物の内へ入と、後見衣をかけるト、供狂言出ル。シテ柱の内ニていふ。
何と申ぞ。月若殿竹の雪を払ひ給ふとて、雪にむもれて空敷成給ひたると申か。荒いたわしや、急で長松へ参り、此由申さふと存ル　幕ノ方向て、
いかに案内申候。月若殿□□（空白二字カ）竹の雪を御払候とて、雪にむもれて空敷成給ひて候。夫々御申候得
ト云テ太コ座ニ付也
女　箔、女帯、びなん、黒骨末広懐中スル。
供　狂言上下、こし帯、嶋。

籠太鼓（十三ノ8）

ワキニ付テ太刀持出、太コ座ニイル。脇、名乗過テ呼出ス。
御前ニ候　畏て候
太刀を太コ座ニ置て、シテ柱ノ先ニて
誠ニ仰せらるればそうじや。いかにはふばいにしてもあれ、科人（とが）じやに由断を致ふ所でハない。番をいたそう　作物の方へ寄て、中を見ずに
いかに清次、今日ハ見舞なんだが、用の事が有ならバ、何成ともおしやれ　や　のふ清次〳〵　作物の中を見て驚き
是はいかな事。清次が籠をやぶつてぬけたが、何とした物で有うぞ。乍レ去申上ずバ成舞　ト云ながら、脇の前へ出て、下ニ居ながら、
ア、ぬけて候　清次が籠を破てぬけて候　さん候　随分念を入、かたく番を致て御座れども、いつの間にやらぬけて候　いや子は御座らぬ　妻は御座る　畏て候　シテ柱の先へ立て
あゝ能きもをつぶいた。急で参う。先方便を以て呼出そう
幕の方へ行いふ。
いかに此家の内ニ清次が妻の有か。某の用所有。出られ候へ。　上より物をお尋有ふずるとの事じや。参られ候へ　直ニワキノ前へ行ていふ
あゝ其方ハ先ぐりの早い人じや　いかに申上候。清次が妻を連（ツレ）て参りて候　ト云テ太コ座ニイル。
シテ・ワキいろ〳〵有。今女を引立テ、〳〵

ト云時ワキ呼出ス。

御まへニ候　畏て候

ト云テ、うでまくりをし、シテノ後ろへ行て、両の手を脇ノ下の他りへかけ

急で立しませ　引立るていをして。

作物の中へ入、戸を〆ながら口ニて

がつたり

ト拍子一ツふミ、太コ座より太刀を持て出て、肩をぬぎ、作物の方へ行て、右ノ方へ片ひざつき、刀ニ手をかけて、

やい女、清次をにがいて口おしい。おのれびつくりともしてみよ。やる事でハない

ワキ詞いかに汝女ニテ有間、太刀も刀も無益也。所詮籠の廻りに太コをかけ、一時替り、番を仕り候へ

ア、　ト云テ、シテ柱へ立て　実にと仰らるればそうじや。女に向て太刀ハ入ぬ事じや。先太鼓を釣て、一時ヅ、番を仕ふずる

ト云テ、太コ座へ太刀ヲ置、扇を入て太コを持出て、作物へ釣り、但し太コの面をシテ柱の方へ向て。其内詞。

いや上々の御分別ハ違ふた物じや。か様に致てハ、由断を仕ふト思ふても由断ハならぬ事じや　釣て仕まい少し開見て

一段と能。最前から早一時ニ成ふずる間、急で番を致そう（ママ）ずる

ト云テ肩ヲぬぎ、左りの手を太コのふちへ少し当、扇ニて手のひらを打。太コ打ず。

どん〳〵〳〵〳〵、どゞ〳〵〳〵、どん一ツ、どん二ツ、どん三ツ、五ツ、十ヲ。今のハ過たがおしかりやるで有う

太コ座ニイル。

シテ、謡少し有。

いや籠の女が狂気仕る程に、此由参て申上うさん候

いかに申上候。清次が妻、殊の外狂気仕候

ト云テ太コ座ニイ、仕廻に脇ニ付入也。太刀を持入

又曰

さん候　ワキ立越見うずるニて候

御尤に候　ト云テ、シテ柱ノ先へ立て、

やア〳〵是へ頼ふだ人の御座候間、籠の廻りをのき候へ

ト云テ太コ座へ付テ、後ニ脇ニ付て入也。

太鼓打様の事

どん一ツ、どん二ツ、どん七ツ、どん九ツ、どん十ヲ、

又曰

どん壱ツ、どん二ツ、どん三ツ、どん七ツ、どん八ツ、どん九ツ、どん十ヲ

嶋、狂言上下、こし帯、小サ刀、扇。

鶏立田（十三ノ9）

御前に候　［畏て候］御尤に候。扨々夥敷庭鳥にて候

（底本一行アキ）畏て候　しゝとゝ〳〵〳〵。とらへて参て候。扨も〳〵見事な鳥ニて候。是を和子様方への御みやげに取てかへり申さふずる

御前ニ候

いかに申上候。あこや御前、物のけの様躰ニ見へさせ給

ひて候。是ハ何と仕らふずる
畏て候
急いで参り申そうずる。扨々気の毒な事でハ有よ。参る程に是じや。いかに此内へ案内申候。平岡殿よりの御使に参じて候　あこや御前おん物の化、以の外にて御座候間、急御出有、加持あつて給ハれとの御使にて候
畏て候
小ひぢりを請じて候
御尤ニ候
畏て候
ちいさきだんを持出、置也。置所ハ、ワキニ問べし。

千引　太刀持　（十三ノ10）

大石ノ作物出ル。ワキ名乗過て、呼出ス。
御前に候　畏て候
扨も〳〵迷惑な儀を仰出された。当国盤の石を他国へ引出し、ちゞニ割捨よとの御事にて候間、此由面々へ相触申さふ。先此小家から申さふ
ツレノ女、ワキノ次ニ居ルニ向て、
いかに此内へ案内申候　此家の内ニハ外ニ人はなく候か　是は何某殿よりの御使ニ参て候。此所の千人石を、上六十、下ハ十五を限て皆々罷いで、他国へ引出し、ちゞニ御割有べきとの御事成間、とう〳〵出て石を御引候へ　左様ニ候ハゞ、人をやといて出され候へ　扨々我が儘な事をいわしします。是非お引無に於ては、当所ニハ叶い候まじ。とく〳〵出で御引候得　シテ柱へ来テ　扨も〳〵女なれバとて気ずいな事を申。とかく銘々ニ触るニハ及ぬ。此所ニて相触申さふ。やア〳〵皆々承り候得。此所の千人の石を他国へ引出し、チゞニ割捨有べきとの御事成間、男女に寄らず、急で石を引れ候得。其分心得候へ〳〵
ト云テ笛ノ上ニイル。シテ、出テ色々有。石ノ中へ中入スル。
中入ノ間、三人出。但し、一人先へ出ル。
か様に候者ハ、此他リニ住居致者で御座る。去程に我等の是へ出ル事、別の儀ニあらず。此所に千人ノ石とて無ン隠大石の候が、かの石に魂有て、年々人を取事限りなし。左有に依て、何某殿よりの仰にハ、男女によらず罷出、かの石を他国へ引出し、ちゞニ割捨よとの御事ニて候間、皆々を呼出し、石引うと存る　ト幕へ向て
のう〳〵皆々おりやるか　何事ぞ　別の事でもおりない。千引の石を他国へ引出せとの御事じや。若引ぬ者有に於てハ、当所の住居ハ成まじくと仰出た程に、石を引うでハ無か　是ハ迷惑なれ共、仰せ出された事ならバ、いざ引う　さア〳〵、おりやれ〳〵　心得た
先見た所が千人迄ハ掛りそうな石でハ無か　其通りじや。縄が有か　いゝや　某の取てこふ程に、ちと待しませ
シテノ後見、縄持出ルを受取、持出て、作物の真中ニ

小縄付て有を、夫へ縄を付ル。
さア〳〵付済だハ　何とよいか　中々。某の拍子を取う程に、其方達ハはやさしませ　ゑいさらゑさら〳〵　ゑいといふてハゑい〳〵〳〵、ゑいや〳〵〳〵　ゑくつもかへして（いふ）
如レ此いふて、はやしていると、ワキ座よりツレ女出て、童一人りして引う、といふ。
ヲモ間何と此石を童一人りして引うずると御申有か。夫こそ幸ひなれ。左有バ其由申上うずる間、夫に暫く御待候へ
太刀持の方へいふ　いかに申上候　太刀何事にて候ぞ下ニ居テ聞　間あれ成女の此石を一人りして引うずると申候
太刀其由申上うずる間、面々ハ私宅へ参り休ミ候得

間之記

△鶴若
○満仲
△智入自然居士
△鬼黒
△斎藤五

間畏て候。
のう〳〵今のを聞しましたか。一刻も早う帰ろう能ろう　さア〳〵おりやれ〳〵　参る〳〵
嬉しヤの〳〵
間、幕へ入ト、太刀持、脇の前へ行て、
いかに申上候。千引の石を大勢して引共少しも働ズ候を、女の一人りして引うずると申候　尤に候
太コ座へ付ている。
石を引縄、長引て置也。是ハシテより好事也。
太刀持共四人。
右間、何レも、嶋、狂言上下、こし帯。

十四〔二十〕

△大木
○豊干
△鳶窟
○三ツ山
△土車

鶴若（十四ノ一）

御前ニ候　畏テ候　いかに鶴若殿、〔ヘ〕父子御召にて候。急御出候へ　中々の事、こう御参り候へ

（底本一行アキ）
ヤア〳〵皆々承り候へ。扨も此度平家追討の為に、鎌倉殿の御代官として、蒲の御ぞうしのりより、九郎御曹子義経を御大将ニテ、西国に御下向有、先木曽殿のろうぜきを御しづめ可レ有為に、義経都へ御上洛（落）にて候。左有ニ依て、次信・忠信兄弟も御供被レ成るゝ間、則明日御立あれば、御供の人々ハ用意被レ致候へ。相かまえて其分心得候へ〳〵

満　中　（十四ノ2）

御前ニ候　　畏て候

子方ヲ呼出ス。又、子ヲ切とき、小袖をかへる。

御前ニ候（シテ、トいふ。かげをかくし候へ、）

畏て候（満中（ママ）ヲつれて、楽やへ入。）

其後、ゑしん僧都、案内ヲ乞。

誰ニて渡り候ぞ　　心得申候

いかに申上候。恵心僧都の御出にて候

聟　入　自　然　居　士　（十四ノ3）

ワキ呼出ス。

御前に候（此文を自然居士方へ持て参り候へ）　畏て候

是ハ如何な事。雲居士（ママ）へ只今御使に参る事、いかゞと存ル所に、此御文を自然居士へ持て参れとの御事ニて候間、急ぎ持て参うと存る（道行）　扨々大事のお使を仰付られて御座る。何かと申内ニ是じや（幕ノ方向て）

いかに案内申候

シテノ詞ニ曰

きしゆれんきやうの床の上ニハ、立かいほつの花の光りゑん〳〵たり、座禅くわんの窓の前ニハ、真如実相の月のかげ明々として、心もすめる折柄、案内といふハいか成者ぞ

是ハ北山衣笠殿よりの御使ニて候　　そもいか成御使ニて候　　ひそかに申せとの御事ニて候　　とにかくに出て対面申さんと、戸びらヲ明けてそともニ出て、（ト舞台へ出ル。入替りて、シテヲ先へ返して、）

是ニお文の候　　さもあれいか成事ぞ　　使にハ何共不レ承候。先々御文を御覧候へ

実に〳〵是ハ断なりと、文を開よミて見れば思いよらぬ、うたゝねの、夢のごとくに見しよりも、しづ心なき恋と成、ヤ、是ハ人たがいニて候か

慥ニ居士の御事ニて候

去らずハ居士をいましむるか、我をこそいやしと思う共、姿ニハ恐れよかし、にくき女の言事かなと、文を引さきしら洲ニ捨、内ニ入（地謡）じやくまくの、柴の戸なぞ（ぼ）をてうたてゝ、むにんぜうとて音もせず。

是ハこざかしき事ニて候へども、人を助くるハ聖りの行と申事の候へば、御出有かしと存る

扨ハ誠ニ空敷成べきか

さん候、今日を限りと見へ給ひて候

去有ば明日の夜参るべし

左様に候ハゞ、あすの夜に入、御出有べきとの御返事を給り候へ

いや〳〵文ハ落事も有べし。只一人よをかけて参り候べし。
お事御前に待候へ
畏て候　ワキノ前ニて　いかに申上候。自然居士あすの夜ニ入、
御出有べきとの御事ニ候
地謡津の国の、〳〵、聟の入海よそにては、深き心を人しるや、面白や人しらん。面白や九重の、〳〵、花の都ハ四方の空、東ハのどかにて、西に向ふや夕日かげ、南より行夜の、北山ハ爰なれや、今ぞ衣笠の山松の、おはやしはやし入や、〳〵　中入。　ワキ呼出ス。
御前に候　　自然居士聟入ニ候間、道筋をそうじ仕れ
畏て候　シテ柱ニていう
扨々頼うだ人の御姫君、自然居士を只一目見給いて、度々文玉章を参らせられ候得共、一度も御返事無候ニより、我等に参り此事を申せとの御事成ニ依て、最前お文を持て参り候へバ、則明日夜ニ入居士の御出有べきとの御事ニて候間、何かの用意を致シ、又道筋をそうじ致せとの御事ニて候。此由申付ばやと存る。やア〳〵皆々承り候へ。明日夜ニ入自然居士の御忍びニて御出候間、道筋をそうじいたせとの御事ニて候。其分心得候へ〳〵

鬼黒　陰山共（十四ノ4）

誰にて渡り候ぞ　　さん候　　君ハ大手のせいろうニ御出ニて候　　御尤に候
夫より語り舞有。　君も御しん所ニ、入せ給へば、各本陣にかへりけり
御前に候　　畏て候
やア〳〵皆々承り候へ。早夜も明方なれば、大将お馬を出べき由仰候間、其分心得候へ〳〵
ワキ、陰山ノ何某。シテ、八幡太郎。

斎藤五（十四ノ5）

斎藤五供
御前に候　　畏て候　　御前ニ候。祇園へ御参詣ニて候
ワキ供
御前ニ候　　畏て候
是ハ誰人なれバ大事の囚人の前へ長具足をたいし来り給ふぞ。大法なれバ、先長具足をば御出し候へ　　長具足を預り申て候　　畏て候　　先御こしを立候へ
御前に候。いかに斎藤五・斎藤六へ申候。今夜ハ此処が御泊りニて候間、左様に御心へ被レ成れうずる。六代子の御宿へは叶うまじき由仰られ候。又兄弟の人々も面々にお宿を召れ候へ。一所にハ叶うまじきとの御事ニて候
面々ニ置申て候　　畏て候
いかに此内へ案内申候。時政〔宗〕よりの御使に参りて候
最前無レ神森ニ而六代子の御供の事、いろ〳〵御申被レ成候ニ付、時政の心得ニてゆるし被レ申候。左様に候へば、六代子の御事ハ、天下の朝敵の長本〔ママ〕ニて候。左あるに依て、其御供の人々なれば、囚人ニまがい無ニ御座一候。然ば囚人

が刀差たるためしなければ、刀を出シ御供被レ成候へと御申候。急で刀をお出し有ふずる　中々の事　いや〳〵左様に仰られ候へば、最前の長具足をもかへし申されふずる間、是より都へ御帰りあれとの御事ニて候　此方へ御渡し候へ

刀を預り申て候　畏て候

いかに案内申候。又御使ニ参て候　頼ミ申人被レ申候ハ、最前ハ刀の事を申候処、御渡し被レ成、一入神妙に被レ存候。左様ニ候へば、刀を御渡し被レ成候上ハ、猶々囚人ニかくれ無候間、縄をも御かゝり被レ成、御供被レ成れうずるとの御事ニて候　中々の事、其通りニて候

いヤ〳〵左様に御申あらば、最前の長具足・刀をも御かへし申さふずる間、急都へ御かへり候へとの御事ニて候

誠ニいたわしき御事成ぞ。君臣の道殊勝に御座候（ママ）

則御諚の通り申て候へば、道利（ママ）につまり是非なく縄を御かゝり候　畏て候

いかに申候。時政よりの御使に参て候　其御事ニて候。最前無レ神森（サイジン）にて六代子の御供の事を色々御申被レ成候程に、頼申人の心得ニて、ゆるされ御供をさせ参らせ候。然ば六代子の御事ハ朝敵として、しかも平家のちやく（ママ）〳〵なれば、囚人の院領へ本のまゝ其御供を被レ成るゝハ、方々も囚人にうたがひなく候。左候（カタナ）へば囚人の身として、刀を差たるためしのなければ、刀を御渡し、則縄を御かゝりあれとの御使ニて候　いや〳〵左様に候へバ、きのふ預りたる長具足を参らせうずる間、是より都へ御かへりあれとの御事ニて候　いや〳〵旁ハいわれざる気色ニて候。然ば其由申そうずる

いかに申上候。斎藤六の宿へ参て候へバ、是にハ替り刀をも渡スまじ、中々縄をもかゝるまじくとて、以の外のけしきニて候　尤に候

扨々みれんな。とてもかゝる縄を、利くつをいふ人じや。思うさましめ付てしんぜう　中々　かふハ申、随分頼ミまするぞや

御前に候　畏て候　先御腰を立候へ　畏て候

いかに斎藤五・斎藤六へ申候。此所ハ駿河の国千本の松原ニて候。六代子を誅し被レ申候。又兄弟の人々ハ縄をゆるされ申候。急で御前へ御参りあれとの御事ニて候

大　木　（十四ノ6）

（底本二行アキ）

御前へに候　畏て候

やあ〳〵杣ども承り候へ。当年ハ本堂のむなぎに成べき大木なけれバ、北谷の大杉ならではなく候間、急ぎ参りて切て参れとの御事なり。相構て其分心得候へ〳〵

後　弐人

か様に候ものハ、長門国観音寺の住僧に仕へ申沙弥にて候。　シカ〳〵

いや、そなたハ是へ何しに来たぞ　〳〵其方が用有そふに告るに依て、何事かと思ふて是迄来たが、扨是ハ何とし

た事じや　その事じや。和御寮も知るとふり、当年ハ本堂の御作事に付、我らを始めそなた衆も、方々を勤る事ではないか　いかにも。夫に付、むな木に成べき大木のなければ、北谷の大杉ならでハなきにより、杣を被二仰付一、木を直に遣さるゝ所に、何くともなく見馴ぬ人の出て杣に申様、何くの樹を切らせ玉ふぞとあれバ、北谷の大杉ならではなきゆへ、大杉伐るべきよし申ければ、前々より此木を残し置れたる程、なか〳〵成まじき由申され、若慈悲この木を伐申され候ハゞ、恨ミをなすべしとあれバ、杣人ども、そこのき玉へ是非に伐申べきと申時、其時彼もの申ハ、我こそ杉の精なる由申、かならず恨をなすべしと有るが、なんぼう不思議な事でハないか　誠に是ハ不思議な事じや　いや此観音の御事ハかくれなき御事。殊に当年ハ御作事にむな木なきゆへ、彼杉を切らせらるゝに、尤草木心なしとは申せども、其精出て杣人に詞を替し、殊に恨を成うずると言は不思議な事でハあるぞ　去ながら是迄来た事じや程に、何程の事が有うぞ、参つて杉を見てこふでハないか　是ハ一段とよからふ（道行アリ。杉ノ他りへ行、二人帰ルナリ。トモニ逃テ）

豊干（十四ノ7）

（底本二行アキ）

是ハ国清寺の門前に住ものにて候。今日ハ心ざす日なれば、国清寺へ参らばやと存候

（底本一行アキ）

先此寺ハ天台大師の旧跡国清寺と申候。則豊干禅師・寒山拾得の住玉ひし所なるが、其拾得と申ハ、豊干或時市に出、児をひろひ養育し、やしない得たる迚、其名を拾得と名付玉ふ。去比拾得の如くなる童子来て帚を持、庭を度々はくを見玉ひて、何くより来る物と尋玉へバ、我ハ寒山より来ると答ふ。其寒山は既に七百里を隔し山なり。夫を遠きと思ハず、朝来て夕に帰る事、不思議の思ひをなす処に、リョキウと申人来りて、豊干に仰られ候ハ、あの弐人ハいか成ものぞと尋玉へバ、豊干の仰には、寒山ハ文殊、拾得ハ普賢なりと宣へバ、其儘弐人を拝し玉ふ程に、両人肝を潰し、何迚我を礼し玉ふぞと御申候へバ、其事にて候、豊干の教へにまかせ、かくの如くと答へ玉へバ、左様に我らが本地を顕ハし玉ふ上ハ、豊干の本地も申べし。あれこそ弥陀の化身なれとて、則宝窟の内に入玉ふ。夫より三人の本地顕ハれ玉ふ。又或説に、豊干ハ釈迦の化身とも申、不断虎にのりて歩行玉ひし人成よし申す。則あの宝蔵のうしろに、御旧院御座候。又寒山帚を持玉ひし事、定めて御ぞんじあるべけれども、人ハ六塵の境界に迷ひ、頓欲・愚痴の三毒絶へず。是を払ひ捨度との御心にて御座有ると承り候。惣じて最前より申如く、委細の事ハ存も致さず候。先我らの聞及びたるハ如レ此に候

言語道断奇特なる事を仰らるゝもの哉。扨は疑ふ所もなき、寒山拾得にて御座あらふずると存る間、御僧もさ様に有つべしう思し召バ、暫く是に御逗留あり、重て奇特を御

らんあれかしと存る

鳶窟（十四ノ8）

（底本一行アキ）か様に罷出たる者ハ、杉村の森に住ゐする木の葉天狗にて候　大会同事。シカ〳〵　我らの是へ出る事別の儀にあらず。此度三熊野に籠り申されたる客僧、不思議の霊夢を蒙り筑紫へ渡り玉ふを、頼ミ申人ハ能御存じなされ、賤しき老翁と御身をやつし顕れ出玉へば、按の如く彼客僧、はや詞をかけ申さるゝハ、我此山に始めて来りし間、〻道しるべせよと御頼申さるゝ。頼ミ申御方申されけるハ、いか成事にて此所へハ御出なさるゝとあれバ、彼客僧答へていはく、此所の地を潔界（ママ）となし、衆生を助けんと御申なさるゝ。頼ミ申人大きに驚（ヅドロキ）き、さ様に候へバ我ら如きのもの迄も、たゝずむ所もなきと答へ、いろ〳〵争ひ御申あり、其まゝとんで帰り玉ひ、我ら如きのものにも参り、彼僧をなぶつて見よとあるに付、とるものもとりあへず、是迄出たが、そなた達ハ何と思ふぞ

おかしき天狗ハより合て、〳〵、喧咤口論、其外あつ気の、智識連風（ツチカゼ）（ママ）、是等をけばくす、時こそ心も、面白けれと、飛行自在に、かけまハり飛まはテ、是迄なりとて、天狗共ハ、〳〵、元のすみかに、帰りけり。

三山（十四ノ9）

（底本一行アキ）誰にて渡り候ぞ　さん候、当所に於て見へ渡りたる山々多しといへど、中ニもあれに見へたるが三山ニて候間、初めたる御方ならば、御出有て御覧候へ　御用の事有バ被レ仰候得

（底本一行アキ）（空白二字分）最前□□の御僧の三山の事を御尋有し程に、則教テやり申たるが、未あれに御座候か、但し又何方へも御通被レ成たるか、参て見申さふずる。是ハ奇特と未是に御逗留被レ成たるよ

（底本三行アキ）所の者とハ誰ニて渡り候ぞ　さん候。南に見へたるが香句（ママ）山、西に見へたるがうねミ山、又是成を耳無山と申候。こゝろ静に御覧（ママ）め候得　御尤に候

（底本四行アキ）か様に候者ハ、和州耳無山の麓に住者ニて候。此程ハ隙無ゆへに何方へも不ニ罷出一候間、今日ハ罷出、心を慰ばやと存る

（底本二行アキ）去程に此三ツ山と申ハ、当所ニ無レ隠名山ニて候。一男姿と申て、南に見へたるを香久山と申て男山ニて御座候（ヨシ）由申候。其子細は、昔公成（きんなり）と申人の御座有たるが、西に見へたるうねミ山の麓に住申ス、桜子と申て色よき女の御座候。又是成耳無山の麓に桂子と申遊女の御座有たるが、公成二人の女の方へかり染に通ひ契りをこめられ候処に、後にハ二道かけて浅からぬ契りニて御座ありたると申。乍レ去公成何と思ハれけん、桜子の方へ斗りかよわれ、桂子の方へおとづれも無、程過参らせ候程に、桂子此様子を見て、所詮命有ても専なしとて、公成をも桜子をも深く恨ミ、耳無

山の池へ身をなげ候。他りの者驚きさわぎ、頓て取上候へども、はや空敷成候間、土中につきこめたると申。左有に依て、耳無山を身無山共申実に候。先我等の存たるハ如レ此に候

（底本一行アキ）

是ハ奇特成事を被レ仰るゝ物かな。夫ハうたがふ処も無、桂子の亡魂顕れ出、御僧の御心中たつとうましますにより、御弔にも預り度思れ、三ツ山の事を御物語り有たると存る間、かの跡を念頃に御弔い有かしと存候

土車　口明ケに出ル。　（十四ノ10）

是ハ信濃の国善光寺の住僧に使へ申社弥にて候。今日も仏前のそうじを致さふと存る

ト云テ、笛ノ上ニイル。ワキ道行過て、大臣柱ニつくト、作物出て、子方トシテ出ル。舞台ニて、善光寺に着にけり、ト謡有テ、シテハ下ニイル。子方、車より下りて、目付柱の方ニイル。シテハ真中ニイテ、拝む時に、狂言、シテ柱よりかゝる

いや是成人ハ物狂ひの躰と見へて候。是ハ内陳ニテ候。左様の者ハ内陳の事ハさて置、天が下ニハ叶うまい

中々の事

ト云テ、太コ座へ付。金春流ハ（ママ）の時ハ、始より太コ座ニ付。喜多流ハ、笛の上ニ居ル。

又習有。

やア〳〵旁ハ何国（イヅクノ）の人なれば、御堂へぬれわらんずニて参られ候ぞ。是ハ内陳ニて候。左様の者ハ内陳の事ハ扨置、天が下ニはかのうまい　中々の事

謡　独りせかせ給ふか

△（ヤア）△（ニイ）△（イヤ）○○（ヘヽ）△△（ヤヲ）

此小鼓の内ニいふ　是を大がへしと言。

いや〳〵何とおしやろう共儘よ。此国ニハ叶い候まじ

又此かへし打時ハ

いや〳〵左様に過言をおしやろうと儘よ。此国ニハ叶い候まじ

是を二段がへしと云。右ニてハ、シテノ謡の船戸（ママ）ニ成ゆへ如レ此いふ

通ふらバとうろう迄よ。左様の推参の者ハ天が下にハ叶まい

大がへしといふ

言語同断左様の推参ヲつくさば、此国ニハ叶うまい

仁右衛門方ニてハ、シテ・子方出て、子方車より下ると、笛の上ニて名乗。

是ハ善光寺の門前の者

大蔵弥太郎方、堂守といふ。

ひとりせかせ給ふか　狂言直ぐニ　通らバとうろう迄よ如レ此短くいふ也。

此内ニ常ノ打切有テ、シテノ上ゲニ成。シテノ上ニ打切有事、土車一番ニ限ル。是大小ノ習也。常の打切ゆへ、右ノ詞いふ也。打切間ニいふゆへ、短くいふがよし。是、伝也。

（底本改丁）

又曰

始メ名乗同断。シテ善光寺に着にけり

狂言、笛ノ上より

いかに是成狂人、狂ひ候へ　御身ハすねたる（ぬ）事を申者かな。只急で狂うて御見せ候へ　扨ハ狂うまじくハ、此如来堂ニハ叶うまいぞ、急で出候へ。いや〳〵此如来堂

斗ハ曲もない。此国ニハ叶うまじい。此国斗ハせばくとも、
天が下ニハ叶うまじいぞ　　思ひも寄ぬ事
シテ、爰ニて、一天四海波、の謡有。
切ニ顔を見合て、下ニイル。